

# モーツァルトと民謡 (3) —— モーツァルトの生涯にわたる民謡との接点 —— 先行研究の再点検

野口秀夫

## 1. はじめに

鳥代：これまでにスコットランド民謡<sup>注1</sup>とフランス民謡<sup>注2</sup>に基づく作品を見てきましたが、今回はモーツァルトの生涯を辿ってさらなる民謡との関わり合いを見ていきましょう。

犬輔：変奏曲のように主題として引用されていれば分かりやすいけど、そうでない部分にしろっと引用されていると気付けないので、その場合にはすでに民謡を知っている当地の人などの指摘をなぞった先行研究に頼らざるを得ませんね。

教授：既に特定されている場合でも、民謡の歌詞だけが独り歩きして、メロディがトレースできないものや、類似性が指摘されただけで実際に引用されたのかどうかの根拠に欠けるものなど問題が多く残っている。諸君たちはできるだけ納得のいく特定に取り組んでほしい。

## 2. 引用元とされる民謡のメロディを求めて

### 2.1 クラヴィーアのための 7 つの変奏曲 ニ長調 K.25 (1766.3 以前、ハーグ/アムステルダム)

鳥代：家族でオランダを訪れていたレーオポルトが故郷の大家さんハーゲナウアー宛に送った 1766.5.16 付け手紙には次のように書かれています。「おなじ小包のなかには、なお 2 曲の変奏曲がありますが、それらは、ヴォルフガングがさるアリア（これは公のご成年とご即位の折に作られたものです）を主題として作り上げねばならなかったもの [K.24]、それにオランダではくまなくだれもが歌ったり、吹いたり、口笛を吹いたりしている別のさる旋律を主題にして、いそいで書き下ろしたもの [K.25] です。これらはたいしたものではありません！」。

犬輔：K.25 の自筆譜は残っていないので曲の表題がどう書かれていたか分かりませんが、初版には「有名な J.G.W.モーツァルトによってクラヴサンのために変奏された、一般に《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》として知られる歌 Air communement dit Willem van Nassau Varié pour le clavecin par le fameux J.G.W. Mozart」との表題があります<sup>注3</sup>。

鳥代：《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》の最も古いメロディ（1568 末）は図 1 のとおりです<sup>注4</sup>。4 拍子と 2 拍子が混在しているのですね。このような表記を見るのは初めてです。



図 1 《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》(1568 末)

犬輔：一方、モーツァルトの主題は図 2 のとおりですから、随分異なったメロディですよ。



図 2 クラヴィーアのための 7 つの変奏曲 ニ長調 K.25 主題

教授：《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》のメロディには多くの異版があるからモーツァルトが参照したと思われる版を見つけることが求められる。因みに1932にはオランダ国歌に採用されたが、その国歌もまた異版の一つである[4拍子、2拍子、3拍子が含まれている♪]。なお、歌が Willem van Nassau と呼ばれるのは15節までである歌詞の頭文字の折句 acrostic からきていることを申し添えておこう<sup>注5</sup>。現存する国歌としては世界で最も古いメロディだとされる（ただし、歌詞については「君が代」が最古である）<sup>注6</sup>。

鳥代：ぴったりの異版が見つかりました。シャンティイ城コンデ美術館の図書館 Bibliothèque et archives du musée Condé du château de Chantilly 所蔵の No.112 あるいは 189 です。1747以降に書かれたとされています（図3）<sup>注7</sup>。



図3 《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》異版（1747以降）

犬輔：確かにこれなら引用元であると言って差し支えないですね。モーツァルトが最新の版を参照したということは当然のこととして理解できます。既に議論したスコットランドの歌のスケッチ Sk1785a (1785/86) の主題もジョルダニーの曲 (1779/81) を参照したと考えられたし<sup>注8</sup>、さらさら星変奏曲 K.265 (1781/82) の主題も作曲の直前に出版されたメロディ（おそらく1780）と酷似していました<sup>注9</sup>。

教授：立て板に水のように順調なスタートだね。今回の調査も期待できそう。手間を省くため進め方のヒントを授けよう。新モーツァルト全集を立ち上げ、最初の編集主幹でもあったエルンスト・フリッツ・シュミット Ernst Fritz Schmid (1904–60) に『モーツァルトのシュヴァーベン遺産』という論文があり、モーツァルト生誕200年記念のパリ会議録『W.A.モーツァルトの作品における外国の影響』（1958）に収められている<sup>注10</sup>。シュミットはモーツァルトの作品にはシュヴァーベン民謡からの影響が大きいと見ており、その理由をレーオポルトの家系がシュヴァーベン出身であるからだとしている。すでにシュミットには『シュヴァーベンのモーツァルトブック』（1948）<sup>注11</sup>という大著があった。そこで諸君たちには最良目なしの新鮮な目でモーツァルトがシュヴァーベン民謡から受けたという影響の再点検もしてもらいたい。なお、シュヴァーベンとはシュトゥットガルトやウルムなどを中心とする現在のバーデン＝ヴュルテンベルク州を、そしてアウクスブルクを中心とする現在のバイエルン州内のシュヴァーベン行政管区の両方を含む一帯を指す。

## 2.2 ガリマティアス・ムジクム K.32 (1766.3、ハーグ)

### (1) ガリマティアス・ムジクム K.32 No.4 [AMAではNo.5] パストレッラ

犬輔：シュミット（1958）によればシュヴァーベンおよびアレマン語地域[シュヴァーベンの西隣]のクリスマス民謡「天国の門が開き、沢山の天使たちが一斉に出てくる Es hat go halt eröffnet das himmlische Tor, die Engele, die kugelet ganz haufeweis hervor」（図4）がわずかに異なる韻律構造でこの曲（図6）と同じであるとし、そしてこのメロディは今でも童謡「私たちはシュヴァーベン出身の音楽家。ヴァイオリン、ヴィオール、フルートを演奏できる Wir sind zwei Musikanten und komm'n aus Schwabenland, wir können spielen Violin, Viol' und Flöt'」（図5）として歌われているといいます。

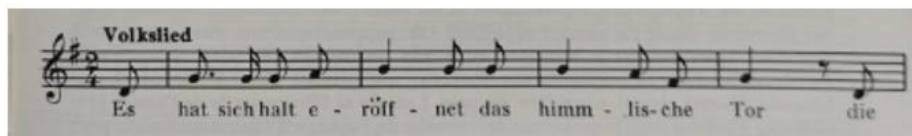


図4 クリスマス民謡「天国の門が開き、沢山の天使たちが一斉に出てくる」♪

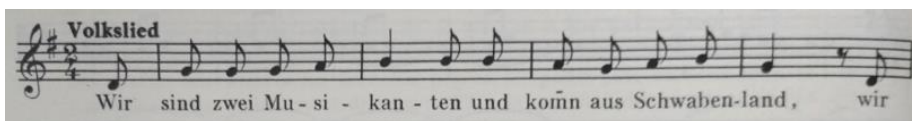


図5 童謡「私たちはシュヴァーベン出身の音楽家。ヴァイオリン、ヴィオール、フルートを演奏できる」♪



図6 ガリマティアス・ムジクム K.32 No.4 パストレッラ ♪

鳥代：K.32 No.4 は 3 拍子、民謡は 4 拍子であり、しかもモーツァルトにはアウフタクトの音がありません。音の進行だけを見れば、図 5 と図 6 はド、レ、ミ、(ファ、ミ)、レ、ド、レ、ミ、ドとほぼ一致しますが、図 4 はド、レ、ミ、レ、シ、ドですから一致とは言えません。

犬輔：日本のキャンプの歌「静かな湖畔」(1936) の元歌とされるドイツ語の童謡「壁に小さな虫が止まっている Auf der Mauer, auf der Lauer」(図 7) <sup>注 12</sup>の方がアウフタクトがないところだけは似ていると思われます。2 拍子ですが。



図 7 童謡「壁に小さな虫が止まっている」

鳥代：知られている中で最も古いこの歌(図 7)の印刷物は、雑誌『バイエルン州 Das Bayerland』(1890) だということから <sup>注 13</sup>時代が異なるわ。シュミットはさらに図 4、図 5 に関し「このメロディのアイデアとリズムカルなカットがモーツァルトのヴァイオリン協奏曲ト長調 K.216 のロンド・フィナーレの一節(図 8)に見られるが、これは間違いなく、人気ヴァイオリニストへのこの曲のユーモラスな暗示であると考えられる」と述べています。こちららは 2 拍子だし、アウフタクトがあるから矛盾はなさそうね。

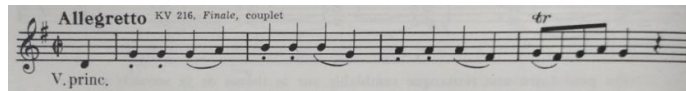


図 8 ヴァイオリン協奏曲ト長調 K.216 のロンド・フィナーレの中間部

教授：いや、K.216 のフィナーレの中間部(図 8)はシュトラスブルガーという舞曲を基にしていることがすでに調査済である <sup>注 14</sup>。似ているだけでは特定できないということであった。K.32 No.4 の場合も似ているだけに留まると言えるだろう。なお新全集序文 <sup>注 15</sup> でギュンター・ハウスヴァルト Günter Haußwald (1908-74) は「K.32 No.4 には、レーオポルト・モーツァルトの手による断片があり、重要な点として、レーオポルトの《農民の婚礼》からの最初のメヌエットのトリオ(図 9) <sup>注 16</sup>からの抜粋が特に明白であり、部分的に同一であると言える」と言っている。三拍子であることだけでもより近いと言えよう。



図 9 レーオポルト・モーツァルト《農民の婚礼》からの最初のメヌエットのトリオ

## (2) ガリマティアス・ムジクム K.32 No.6 [AMA では No.7] アレグレット

鳥代：アルフレート・アインシュタイン Alfred Einstein (1880-1952) はケツヒェル第 3 版 <sup>注 17</sup>で「個々の作品の起源に関する調査はほとんど行われていない。No.7 は、ヴァレンティーン・ラートゲーバー《アウクスブルクの食卓砂糖菓子 Augsburgischer Tafel-Confect》の第 2 部の第 11 番の冒頭を思い出させる」と書いています。ターフェル・コンフェクトはデザートでの音楽、ターフェル・ムジークがコース料理での音楽という意味と解釈すればいいのでしょうか。その第 2 部の第 11 番は「嫉妬と憎しみが解き放たれたとき、忍耐が私を守ってくれますように Geduld beschützt mich, wann Neid und Hass wird rasen」という歌詞の歌です(図 10)。冒頭数小節は図 11 と全く同じメロディです。

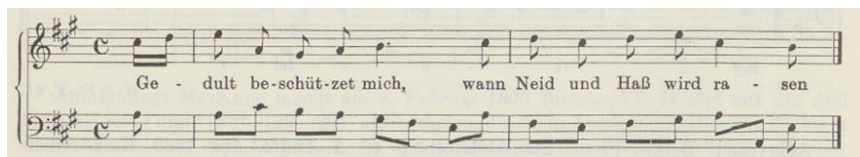


図 10 ラートゲーバー「嫉妬と憎しみが解き放たれたとき、忍耐が私を守ってくれますように」



図 11 ガリマティアス・ムジクム K.32 No.6 アレグレット

犬輔：シュミットはこれに対し、「シュヴァーベン民謡「雨が降ったのはそれほど前のことではない、滴はまだ東屋から落ちている S'isch no net lang, dass s'g'regnet hot, die Läuble tropflet no」にも、同じ種類のリズムカルな核心が見られるように思える」と言っています。この歌には 7 つの版が残されていますが <sup>注 18-1</sup>、そのうちの一つを引用します(図 12) <sup>注 18-2</sup>。



図 12 民謡「雨が降ったのは、それほど前のことではない、滴はまだ東屋から落ちている」



### (3) ガリマティアス・ムジクム K.32 No. 9 [AMA では No.10] アレグロ

鳥代：シュミットによれば「アレグロ第 10 番の主題はアウクスブルガー・ターフェル・コンフェクトから来ています。そこには《希望 Von der Hoffnung》というタイトルの下に「希望がなければ、私はもう生きていないでしょう Wann d'Hoffnung nicht wär so lebt' ich nicht mehr」という歌詞が主題に記されている」といい、ターフェル・コンフェクトと K.32 No. 9 が並べてあります (図 13-1<sup>注19</sup>、図 13-2)。(図 13-2 の印刷ミスは訂正しておきました)。

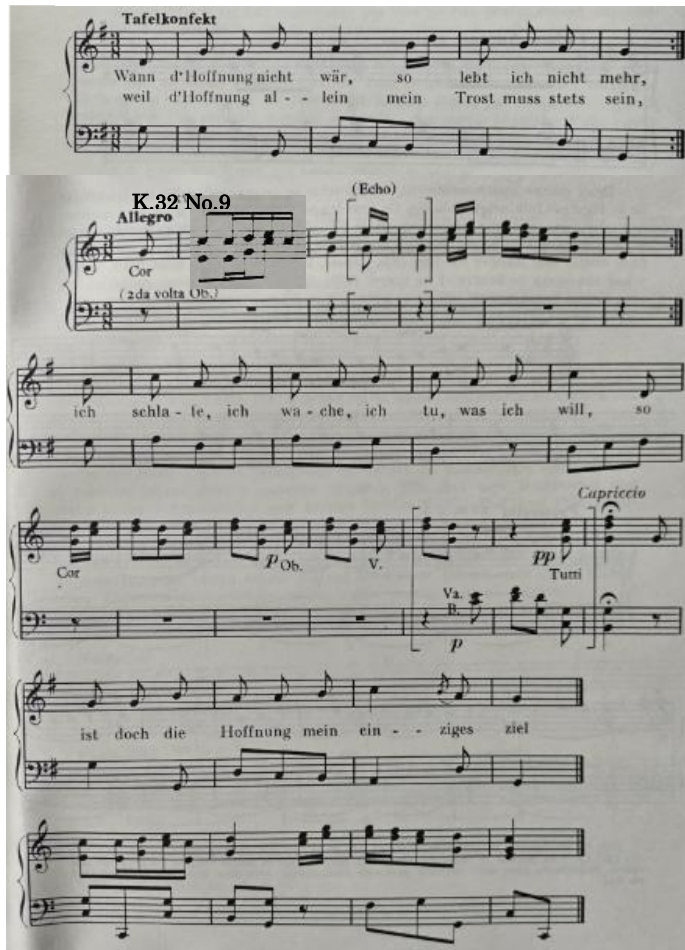


図 13-1 (上段)  
ラートゲーバー「希望がなければ、私はもう生きていないでしょう」

図 13-2 (下段)  
ガリマティアス・ムジクム  
K.32 No. 9 アレグロ ♪

犬輔：ところでハイドンがカプリッチョ「8 人のへぼ仕立て屋に違いない [イノシシの去勢に 8 人ばかり] Acht Sauschneider müssen seyn」ト長調 Hob. XVII/1 (1765) (図 14)<sup>注20-1</sup>で引用したとされる民謡が原曲だという説もあります<sup>注20-2</sup>。

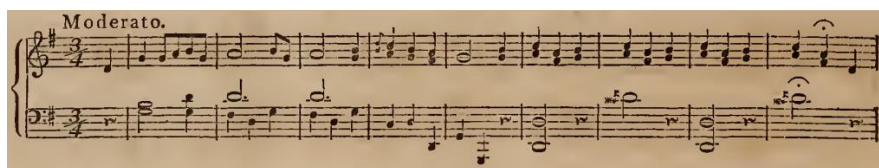


図 14 ハイドン カプリッチョ「8 人のへぼ仕立て屋に違いない」ト長調 Hob. XVII/1 (1765) ♪

但しハイドン研究においてもその引用元は不明とされています<sup>注20-3</sup>。また、モーツァルトがハイドンの曲を翌年に引用した可能性は、ハイドンがその頃エステルハーツィ家に仕えていたことから極めて低いと思われます。

鳥代：ハイドンの曲はモーツァルトの K.32 No. 9 (図 13-2) よりもターフェル・コンフェクト (図 13-1) の方に近いですよ。

教授：トーマス・ホッホラトナー Thomas Hochradner (1963-) は「民衆の間で作られた歌ではないが、後に民衆に採用された曲もある」と言い、その一つとして「おそらく「8 人のへぼ仕立て屋に違いない」が劇場での音楽練習用に書かれた備品 Fundus der Musikpraxis から採られたものであろう」(おそらくジングシュピールで使われた練習用の楽譜) という<sup>注21</sup>。それがどれほど普及したのかはともかく、ハイドンはそこからカプリッチョのタイトルを決めたのであろう。だが、ホッホラトナーが言うように両者とも曲はあくまでもターフェル・コンフェクトをテンプレートとして使ったものであろう。

犬輔：つまりターフェル・コンフェクトが親で「8 人のへぼ仕立て屋に違いない」と K.32 No. 9 は兄弟だということなんですね。

## (4) ガリマティアス・ムジクム K.32 ドーナウエッシンゲンの演奏版 No.2a [AMA では No.3]

犬輔：シュミットは「曲（図 16）はシュヴァーベンとドイツ語圏の童謡を再現しており、バグパイプの 5 度に基づいて作られている。歌詞は「ねんねんころり、バターと砂糖をたくさん入れれば、小さなケーキは美味しいよ Eia Popeia, die Kuechla sind guet, wenn mer brav Butter und Zucker nei tuet」（図 15）であり、二つのメロディの関係は完全に説得力がある」と述べています。この歌詞は『シュヴァーベン歌集』（1938）<sup>注 22</sup>に載っているということですが、Youtube では同じメロディが「ねんねんころり、ムーズリ〔穀粒・干した果物・ナッツなどにミルクまたはヨーグルトをかけた料理；主に朝食用〕に砂糖とシナモンを加えると美味しいよ Eia popeia, das Muesli isch guet, wenn mer brav Zucker und Zimet dra tuet」という歌詞で歌われています<sup>注 23</sup>。

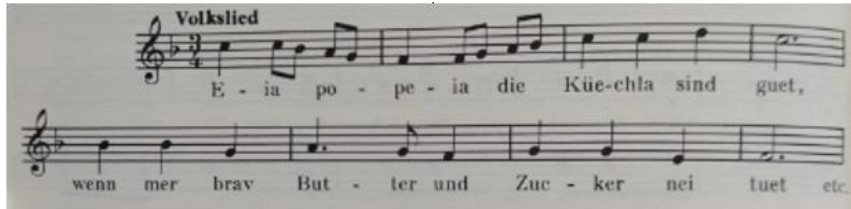


図 15 童謡「ねんねんころり、バターと砂糖をたくさん入れれば、小さなケーキは美味しいよ」♪



図 16 ガリマティアス・ムジクム K.32 ドーナウエッシンゲンの演奏版 No.2a パストレッラ ♪

鳥代：図 15 では 4 小節の単位でメロディが繰り返されますが、図 16 でも同様に繰り返しは生かされています。図 16 の終結部は器楽曲ゆえコードで纏めているものと思われます。

## (5) ガリマティアス・ムジクム K.32 No.17 フーガ

鳥代：フィナーレを飾るフーガ（図 17）には K.25（図 2）と同様、《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》のメロディが使われています。クラヴィーアとオーケストラの違いを考慮すれば全く同じと言えるでしょう。

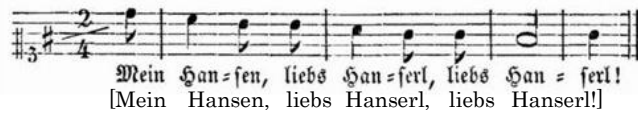


図 17 ガリマティアス・ムジクム K.32 No.17 フーガ ♪

犬輔：ガリマティアス・ムジクムはオランニエ公ヴィレム 5 世の即位祝いの音楽ですから、オランダの聴衆に喜ばれる曲で構成されたものと思われます。オランダの曲以外に南ドイツとザルツブルクの音が混ざり合った音楽は、ハウスヴァルトの言うように「異国情緒の魅力を醸し出すものであっただろう。そしておそらくこれが意図されたことだったのだろう。ザルツブルク出身の天才少年が、多彩な娯楽曲を織り交ぜて、外国の宮廷に敬意を表しているのだ」<sup>注 24</sup>ということだと思われます。

## 2.3 オッフエルトリウム「女より生まれた者の中で」ト長調 K.72 (71.5-6/70 代末、ザルツブルク)

鳥代：オットー・ヤーンの『W. A. モーツァルト』(1856) <sup>注25</sup>によれば「アルトエッティング宮廷オーケストラのオルガン奏者マックス・ケラーの話として、シャフホイトル教授は、モーツァルトが少年時代にゼーオンのベネディクト会修道院をよく訪れ、修道院ではヨハネス神父として知られるフォン・ハーシー von Haasy 氏をとてとても気に入っていたと報告している。修道院に入るとすぐに、彼は友人に飛びつき、よじ登り、頬を撫でて



と歌った [Hansen の綴りはミスプリントと思われる。以後の文献では Johannes の短縮形 Hans にザルツブルク地方の縮小辞 erl を添えた本来子供向けの呼び名 Hanserl に統一されています。なお、ザルツブルクでは s を清音として発音するので「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」と訳します]。このシーンは大笑いを引き起こし、彼はそのシーンとそのメロディで徹底的にからかわれた。ヨハネス神父の名を祝う祝日が近づいたとき、モーツァルトはお供え物として彼にオッフエルトリウムを贈った。その曲は女より生まれた者の中で Inter natos mulierum non surrexit maior という言葉で楽しく活発に始まり、次に洗礼者聖ヨハネ Joanne Baptista という言葉で上のメロディが入る」と書かれています。この報告の出典は新全集校訂報告 <sup>注26</sup>によれば 1851.10.27 にカール・エミール・フォン・シャフホイトル Karl Emil von Schafhäütl (1803-90) がミュンヘンで書いた 3 ページの予備報告書 (彼はその年に K.72 の初版を出版した) ということです。

犬輔：例えばソプラノ 33 小節目の「洗礼者聖ヨハネ Joanne Joanne Baptista」という歌詞のところ (図 18) にこのメロディが出て来るというのですね。



図 18 オッフエルトリウム「女より生まれた者の中で」ト長調 K.72 ♪

鳥代：シャフホイトルがドイツ語歌詞を追記した K.72 の筆写譜 (校訂報告によれば 1840 頃) には表紙にシャフホイトルによる注記があります (図 19) <sup>注27</sup>。訳してみましょう。「この曲はゼーオン修道院におけるヨハネス神父の聖名記念日のためにモーツァルトによって作曲されました。ゼーオン修道院にはザルツブルクのモーツァルトがよく来ていました。モーツァルトは非常に人気があり、特にヨハネス神父が深い愛情を抱いていたためです。彼は修道院に着くといつも首に腕を回してキスをしたそうです。どういう訳か、ここには「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」の引用はされていません。

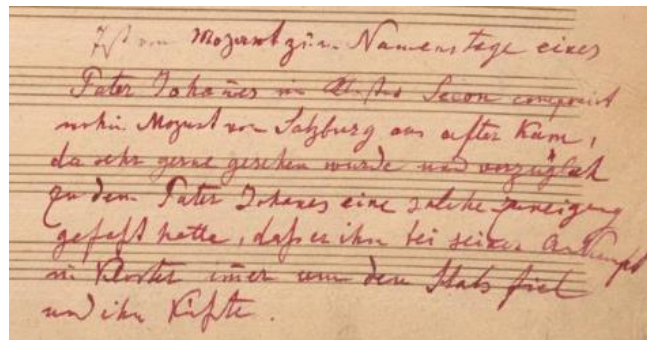


図 19 オッフエルトリウム「女より生まれた者の中で」ト長調 K.72 筆写譜へのシャフホイトルによる記入

教授：シャフホイトルの情報はすべてマックス・ケラー Max Keller (1770-1851) に依っている。ケラーは少年期にゼーオン修道院で歌を歌っており、1780 に修道院のオルガンでモーツァルトの演奏を聴いたという。彼は後に修道院のオルガン奏者および客員使用人となり、1799 にオルガニストとしてブルクハウゼンに移った。1801 にアルトエッティングの礼拝堂オルガニストとなり、そこでシャフホイトルが彼を見出した。ケラーは、ゼーオンの司祭を通じてオッフエルトリウムの作成について詳しく知ったという <sup>注28</sup>。

犬輔：そのような伝言ゲームのような状況の中で「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」のメロディを誰が採譜して、どのように伝わって来たのかに大きな疑問を感じます。

教授：ケッヒェル 6 版 <sup>注29</sup>は、K.72 の作曲年代を恐らく 1771.5-6 (ケッヒェル初版では 1769) とし、「この逸話にもかかわらず、この作品はモーツァルトの少年時代のもではなく、早くてもイタリアから最初に帰国した翌年であり、洗礼者ヨハネの祝日が 6 月に当たるため、制作月もより正確に決定することができるのである」といい、逸話を疑問視している。

鳥代：でも、少年時代によくゼーオンを訪問し、「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」を歌ったのは本当かも知れず、K.72 の作曲はその数年後だった可能性もあり得ますよ。



犬輔：カール・ド・ニ Carl de Nys (1917–1996) は『モーツァルトの宗教音楽』(1982) 注<sup>30</sup>で「シャッフホイトルのいう、ゼーオンのベネディクト会の修道院における逸話は信じるに足りないものである」と断言している一方で、「洗礼者聖ヨハネ Joanne Joanne Baptista」のところでは、ザルツブルク地方の民謡「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」の、飛び跳ねるようなモチーフを用いている。これは聖母マリアがエリーザベトを訪問したときに、エリーザベトの「胎内で子供がおどった」という『ルカによる福音書』の一節を思い出させる目的であったのだろうと想像をたくましくしています。ここでは「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」をザルツブルク地方の民謡だと言っています。

鳥代：さらにローベルト・ミュンスター Robert Münster (1928–2021) は『バイエルン地域史雑誌』(2007) 注<sup>31</sup>で「私のハーンセル、親愛なるハーンセルという言葉での呼びかけは民謡からの引用ではありません」と述べていますよ。

教授：さあ、どうするかね。「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」という歌詞とメロディはモーツァルトの創造なのか、あるいは全くのでっち上げなのかどうか。

犬輔：一応ザルツブルクの民謡を調べてみました。該当する歌詞やメロディの曲はありませんでしたが、リズムの似ている曲は複数ありました (図 20 注<sup>32</sup>、図 21 注<sup>33</sup>、図 22 注<sup>34</sup>)。

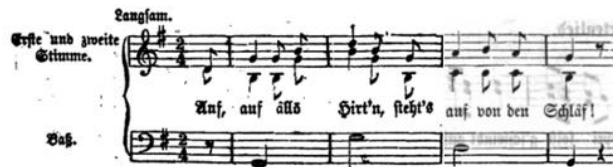


図 20 ザルツブルク民謡「クリスマスの歌」

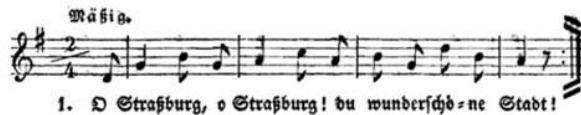


図 21 ザルツブルク民謡「外国軍」



図 22 ザルツブルク民謡「職人の歌」

鳥代：少年モーツァルトが「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」と歌いながらヨハネス神父に飛びついた話が本当だとして、そのオリジナルのメロディを覚えていなかったゼーオンの司祭がケラーに話を伝えるに際し、当地で馴染みのメロディを付けて伝えたのでしょうか。あるいはケラーがシャッフホイトルに伝えるに際してメロディを付けて歌ったのかも知れません。いずれにせよ譜面にしたのはシャッフホイトルだったのでしょうか。

犬輔：一方でモーツァルトが「洗礼者聖ヨハネ Joanne Joanne Baptista」の部分作曲するときに、ザルツブルクの民謡のリズムが浮かんだということはあるかも知れません。カール・ド・ニの言っていることが半分正しいことになります。

教授：諸君たちの説が正しいとすると、ザルツブルク民謡のリズムはモーツァルトと司祭が別々に想起したことになり、話が出来すぎだ。私は「洗礼者聖ヨハネ Joanne Joanne Baptista」の部分はモーツァルトがザルツブルクの民謡のリズムからの無意識の（あるいは意識的）借用だが、ケラーから伝えられた「私のハーンセル、親愛なるハーンセル」の逸話にモーツァルトのリズムとメロディを嵌め込んだのはシャッフホイトルの創作ではないかと考える。

## 2.4 交響曲 変ホ長調〔第 19 番〕K.132 第 2 楽章 (3/8 拍子) (1772.7、ザルツブルク)

犬輔：この曲の第 2 楽章には異例に長いアンダンテ (3/8 拍子、151 小節) と、通常の長さの簡素な「アンダンテ・グラツィオーソ」(2/4 拍子、56 小節) が書かれています。ニール・ザスロー Neal Zaslaw (1939– ) によれば注<sup>35</sup>「この例外的な楽章は、なんらかのその土地でしかわからない意味をもっていたに違いない。すなわちザルツブルクの事情を暗示しているか、さもなければ個人的なジョークである。しかしそれが何であったにせよ、われわれには知るすべがなくなっている。このような特殊性ゆえに、(知られているかぎり) 引用を含まない、汎用の“抽象的な”楽章がこれにとって代えられたのであろう」とし、「その冒頭の旋律は、グレゴリオ聖歌のクレードの最初の 7 音を写している。先に進むと、ドイツの有名なクリスマス・キャロル『ヨーゼフ、私のいとしいヨーゼフ Joseph, lieber Joseph mein』(Resonet in laudibus というラテン語のテキストでも知られている)の変形もあらわれる。[中略]モーツァルトは、第 37～56 小節の第 2 ヴァイオリン・パートと、第 128～147 小節の対応箇所、引用を織り込んだ」と述べています。

教授：「ヨーゼフ、私のいとしいヨーゼフ」は、1544 にヨハン・ヴァルターによって初めて印刷物として出版された。ドイツ語のテキストはザルツブルクの修道士からのものである可能性があるとされている<sup>注36</sup>。

鳥代：図 23-1 に「ヨーゼフ、私のいとしいヨーゼフ」<sup>注37</sup>、図 23-2 に K.132 第 2 楽章の第 2 ヴァイオリンを並べて比較しましょう。



図 23-1 (上段)  
クリスマス・キャロル「ヨーゼフ、私のいとしいヨーゼフ」

図 23-2 (下段)  
交響曲 変ホ長調 [第 19 番] K.132  
第 2 楽章 (3/8 拍子)

犬輔：これは完全に一致しています。あっ、K.132 第 2 楽章の第 2 ヴァイオリンのメロディ (図 23-2) は K.32 ドーナウエッシンゲンの演奏版 No.2a (図 16) とそっくりです。ということは K.32 ドーナウエッシンゲンの演奏版 No.2a が直接引用したのは「ねんねんころり、小さなケーキは美味しいよ Eia Popeia, die Kuechla sind guet」(図 15) というより、「ヨーゼフ、私のいとしいヨーゼフ」(図 23-1) のほうが可能性が高いと思われます。

教授：新全集の序文<sup>注38</sup>も K.32 No.2a は「ヨーゼフ、私のいとしいヨーゼフ」の方を支持している。よりぴったりのものが出てきたからには、少しだけ似ていたものはお引き取りいただくということだ。

## 2.5 ミサ・プレヴィス (《小クレード・ミサ》) へ長調 K.192 (1774.6.24、ザルツブルク)

鳥代：自筆譜に記入された日付から聖ヨハネの祝日のために作曲されたものと考えられます。そこで同じ祝日のための曲 K.72 との共通メロディを探してみると、やはりザルツブルクの民謡のリズム (図 20～図 22) の変形がベネディクトゥスにありました (図 24)。



図 24 ミサ・プレヴィス (《小クレード・ミサ》) へ長調 K.192

犬輔：でもなぜこのメロディとリズムが聖ヨハネの祝日に共通して出て来るのか不思議ですよ。K.72 の「洗礼者聖ヨハネ Joanne Joanne Baptista」(図 18) を引用したのでしょうか。それともザルツブルクの民謡のほうに聖ヨハネに関する別の曲があるのでしょうか？

教授：出典は不明だが「モーツァルトがこの祝日の有する庶民性によって民謡風のモチーフを用いたという見方もあります」<sup>注39</sup> という解説があることを紹介しておこう。

## 2.6 ディヴェルティメント 変ホ長調 K.252 フィナーレ (1776.1-8、ザルツブルク)

犬輔：シュミットは次のように言っています。「モーツァルトは、アウグスブルクのターフェル・コンフェクトに挿入された『猫はネズミを追うのをやめず、ガチョウは海を飛ぶ Die Katz', die lasst das Mausen nit, die Gans fliegt übers Meer』という言葉に基づいたクオドリベのメロディに特別な偏愛を持っていたようだ。彼はいくつかの作品にこのメロディを登場させている。例えば 2 台のクラヴィアとオーケストラのための協奏曲 K.365 のフィナーレのテーマである。このメロディは今日ではアンドレアス・ホーファーを讃える有名な曲「束縛されマントヴァへ Zu Mantua in Banden」(♩) として知られている [現在ティロルの州歌である]。管楽器のディヴェルティメント変ホ長調 K.252 のロンド・フィナーレのリフレインでは、おそらくザルツブルク大司教宮廷向けの食卓音楽として意図されている。客人たちはこの種のジョークを、食卓の楽しみによる歓迎の言葉として受け入れたことだろう」。

教授：「猫はネズミを追うのをやめず」は諺で、「悪い習慣はやめられない」ということだ<sup>注40</sup>。また「ガチョウが海の上を飛べば、戻ってくるとき以前と同じようにガー、ガーと叫ぶ」というラテン語の諺は「知性と必要な訓練を携行した者のみが、旅の恩恵を受けることができる」<sup>注41</sup> という意味だ。



鳥代：そのことわざに基づいた民謡を図 25 に、K.252 のロンド・フィナーレを図 26 に、そして参考までに K.365 のフィナーレを図 27 に示しましょう。

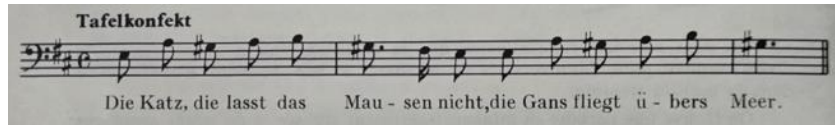


図 25 ラートゲーバー「猫はネズミを追うのをやめず、ガチョウは海を飛ぶ」

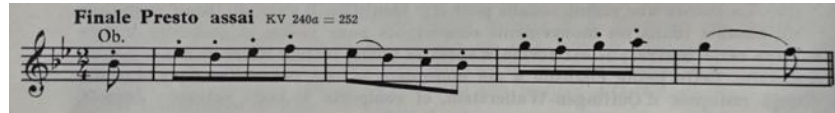


図 26 ディヴェルティメント 変ホ長調 K.252 フィナーレ ♪



図 27 2 台のクラヴィアとオーケストラのための協奏曲 K.365 フィナーレ ♪

## 2.7 セレナーデ《ハフナー》ニ長調 K.250 第 1 メヌエット ト短調 (1776.7、ザルツブルク)

犬輔：シュミットはまたこうも言っています。「わずかに様式化された短調のパロディがハフナーのセレナーデ K.250 に見られる (図 29)。ここでもシュヴァーベン舞曲のルーツが確認できる。これはメヌエットの短調の主題である。シュヴァーベン舞曲の主要テーマに基づいて作られている。この小さな歌はリース地方、つまりすでに示されているエッティンゲン・ヴァラーシュタインの地域で書かれ、Jaggele, Jaggele, Bira schüttla, Bira went net falla のテキストが含まれている」。ところで、この歌詞はどう訳せばいいのですか。

教授：ヤッカリ Jaggele, Jaggele は中世以来ティロルでヤコブ Jakob のことを言い<sup>注 42</sup>、古くからの農場や不動産のほとんどに欠かせない家の名前の一つでもある<sup>注 43</sup>とのことだ。だが、この歌のヤッカリはその家名ではなく、一般のファーストネームだろうから、歌詞は「ヤッカリ、ヤッカリ、梨の木を揺らせ、どうにも梨は落っこちない」と方言で訳しておこう (図 28)。なお、シュヴァーベン舞曲が元で、リース地方で書かれたという根拠はない。

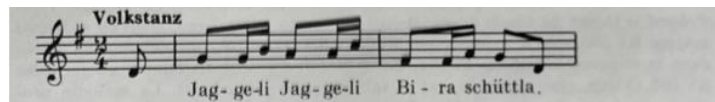


図 28 民謡「ヤッカリ、ヤッカリ、梨の木を揺らせ、どうにも梨は落っこちない」

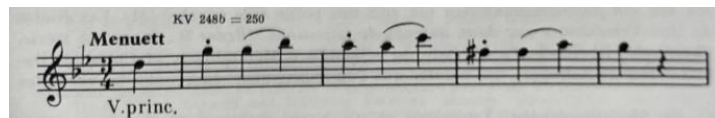


図 29 セレナーデ《ハフナー》ニ長調 K.250 第 1 メヌエット ト短調 ♪

鳥代：ではティロル方言がそれほどきつくない異版<sup>注 44</sup>から詩の全容を訳しておきましょう。

表 1 子供の歌および子供の謎々から「農夫はヤッカリを送り出す」

Es schickt der Baur das Jaggele aus, soll die Birnen schütteln, Jaggele will nicht Birnen schütteln, Birnen wollen nicht fallen. Schickt der Baur das Hündlein aus, Hündlein soll Jaggele beissen. Hündlein will nicht Jaggele beissen, Jaggele will nicht Birnen schütteln, Birnen wollen nicht fallen. Schickt der Baur das Prügele aus, Soll das Hündlein petschen. 同様に 4 行 Schickt der Baur das Feuer aus, Soll das Prügele brennen. 同様に 5 行 Schickt der Baur das Wasserle aus, Soll das Feuer löschen. 同様に 6 行 Schickt der Baur das Oechslein aus, Soll Wasser saufen. 同様に 7 行 Schickt der Baur den Metzger aus, Soll das Oechslein schlachten. 同様に 8 行 Schickt der Baur den wilden Mann, Soll den Metzger fressen. 同様に 9 行	農夫はヤッカリを送り出す、 梨の木を揺らさなければなりません。 ヤッカリは梨の木を揺らしたくない、 梨はどうしても落ちない。 農夫は小犬を送り出す、 小犬はヤッカリに噛みつかなければなりません。 小犬はヤッカリに噛みつきたくない、 ヤッカリは梨の木を揺らしたくない、 梨はどうしても落ちない。 農夫は棍棒を送り出す、 小犬を打たなければなりません。 同様に 4 行 農夫は火を送り出す、 棍棒を燃やさなければなりません。 同様に 5 行 農夫は水を送り出す、 火を消さなければなりません。 同様に 6 行 農夫は子牛を送り出す、 水を飲まなければなりません。 同様に 7 行 農夫は肉屋を送り出す、 子牛を屠殺しなければなりません。 同様に 8 行 農夫は野人を送り出す、 肉屋の命を奪わなければなりません。 同様に 9 行
(以下同様)	(以下同様)

犬輔：託した依頼の成就を急ぎ立てるため 1 番目の対策、2 番目の対策、…、n 番目の対策を、絆創膏のように貼っていくというストーリーで、結局成達は問題ではなくなります。狙いとしてはロシアの民話「おおきなかぶ」<sup>注 45</sup>と似た畳み込みによる繰り返しの心地よさ（心地悪さ？）を子供が喜ぶというものでしょう。

鳥代：このセレナーデはエリーザベト・ハフナーとフランツ・クサヴァー・シュペートの結婚式を記念して書かれ、挙式前日の 1776.7.21 に演奏されました。この歌詞がパロディになっているとは考えにくいですね。もしかしてティロルと関係があるのでしょうか。

教授：そうだ。父ジークムント・ハフナーはザルツブルク市長を務めあげ、4 年前に亡くなっているがティロル生まれであった<sup>注 46</sup>。娘エリーザベトはザルツブルク生まれであるが、新郎シュペートは南ティロル生まれである<sup>注 47</sup>（つまり 1757 に亡くなった<sup>注 48</sup>シュペートの父親もティロルに所縁がある）。ト短調のメヌエットの最初（4 小節）にティロルの童謡を引用したのはモーツァルトが両家の父親への回想を慮ってのことだったのだろう。

犬輔：お言葉ですが、バラシュ・ミクシ Balázs Mikusi (1972-) は違う説を唱えています<sup>注 49</sup>。彼は高校生のとき学校でこの楽章を楽譜を見ながら聴き、「春の青いスマレが開いたら／農夫は元気に仕事をしているようだ Ha nyílnak a tavaszi kék ibolyák, / A földműves jókedvű munkához lát」というハンガリー語の歌の引用であることに気付き、悲劇的な楽章に対するジョークだと思いうという説を学友に披歴したというんです。その後この歌はドイツ語の「農夫は 3 月に馬を利用する / 彼は野原、牧草地、土地で働く Im Märzen der Bauer sein Pferdchen einspannt, / Er schafft auf den Feldern, den Wiesen, dem Land」がオリジナルと分かり、楽譜も入手できたといひます（図 30）。



図 30 民謡「農夫は 3 月に馬を利用する」♪

鳥代：初めの 8 小節は図 29 とそっくりですね。但しこちら（図 30）は長調です。ミクシは「シュミットのメロディ（図 28）の輪郭の同一性には議論の余地がありませんが、拍子とリズムが異なるため、短調に翻訳された“引用”を認識することが困難であり、またメロディが 18 世紀のリスナーにとっても馴染みのあるものであったという可能性の具体的な証拠を提供していない」ということで、こちらのほうが適切であると述べています。

教授：それで、ミクシは図 30 のメロディが 18 世紀のリスナーにとっても馴染みのあるものであった証拠を提示しているのかね。

犬輔：図 30 より古い版の歌詞を分析してこう述べています。「個々の登場人物の名前は、特にクラリスがグレゴリウスとナッツを割る 8 月のスタンザと、フィリスがデイモンと結婚する 4 月のスタンザで多かれ少なかれ有益である。これらのラテン語の名前は、19 世紀にはテキストに記載されることはほとんどなかった。そして、フィリスとデイモンは、18 世紀半ば頃に作曲された牧歌的なテーマを持つ数百曲の代表的な人物であり、この曲は 1770 年代頃までドイツとオーストリア全土で信じられないほどの人気を博した。この証拠は必然的に間接的だが、それを考慮すると、モーツァルトのザルツブルクの聴衆がこの曲を知っていた可能性があるという仮定は非現実的ではない」。つまり、K.250 より前に歌われていたという可能性をほのめかしています。さらには「引用に含まれる暗示を今日完全に確実に解読することはできないとしても、最初の小節の引用の可能性がモーツァルトの文学におけるト短調メヌエットのイメージを根本的に変えることは明らかな。曲の最初の行を短調に歪め、その後、この楽章の冒頭で“爆発”したのは聴衆の笑い声であった」と結論付けています。

教授：ティボール・ユハシュ Tibor Juhász (1992-) はこう言っている<sup>注 50-1</sup>。「『陽気な農夫』(春の青いスマレが開いたら) は元々シュヴァーベン民謡「ヤッカリ、ヤッカリ、梨の木を揺らせ Jaggele, Jaggele, Bira schütla」で、少し回り道をしながら私たちにたどり着いた<sup>注 50-2</sup>。この有名な[ハンガリー語の]歌詞は、多くの曲を作曲、翻訳しているエルネー・ロッサ Rósa Ernőnek (1909-72) のおかげである」。つまり、図 28、図 30、図 29 の順であるというのだが、むしろ図 28、図 29、図 30 の順であるとも考えることもできるのではないか。ラテン語の名前が使われているのは 18 世紀の歌であることを装っている疑いもあるからだ。

## 2.8 ディヴェルティメント変ロ長調 K.287 (1777.6、ザルツブルク)

## (1) ディヴェルティメント変ロ長調 K.287 第 2 楽章 変奏曲アンダンテ・グラツィオーソ

犬輔：この曲はロードロン伯爵夫人マリーア・アントーニアのために作曲されたディヴェルティメントです。第 2 楽章はドイツ民謡「それ、急げ、おいらはハンス、ご機嫌だ Heissa, hurtig, ich bin Hans und bin ohne Sorge」の主題による 6 つの変奏曲とされていますね<sup>注 51</sup>。

鳥代：先にモーツァルトの曲の方を見ておきましょう。Vn1 のパートの最初のところを図 31 に示します。変奏の主題になります。



図 31 ディヴェルティメント変ロ長調 K.287 第 2 楽章 変奏曲アンダンテ・グラツィオーソ

犬輔：では民謡の楽譜を探しましょう。ありました。ゴットロープ・ヴィルヘルム・ブルマン Gottlob Wilhelm Burmann (1737-1805) 詩ヨハン・アブラハム・ペーター・シュルツ Johann Abraham Peter Schulz (1747-1809) (右図) 作曲の《ハンスとハンネ Hans und Hanne》という歌の歌い出しが「それ、愉快だ、おいらはハンス、ご機嫌だ Heida lustig, ich bin Hans und bin ohne Sorge」です<sup>注 52-1</sup>。歌詞の出版は 1774、楽譜の出版は 1779 (K.287 より遅い) です<sup>注 52-2</sup>。ただ歌詞の冒頭が Heida lustig となっており、従来言われてきた Heissa, hurtig とは異なっています。



鳥代：肝心の楽譜はどうなっているの？

犬輔：それが…。全く似ても似つかないんです (図 32) <sup>注 52-3</sup>。



図 32 シュルツ《ハンスとハンネ》から「それ、愉快だ、おいらはハンス、ご機嫌だ」

鳥代：他に楽譜はないのかしら。

犬輔：ヨハン・マルティン・クラウス Joseph Martin Kraus (1756-92) に「ハンスとハンネ Hans und Hanne. "Heyda lustig! ich bin Hans"」ハ長調 VB 78 (以前は VB 77) という二重唱があるんだけど<sup>注 53</sup>、1785 の作品だし、音源を聴いてみるとメロディも異なるんだ<sup>注 54</sup>。

鳥代：まだほかにもあるかも知れないわ。

犬輔：さらに二重唱の筆写譜がありました (無記名です)。ヴァイオリン譜のみ残っていますが、タイトルに Heisa Lustig! ich bin Hans と書かれています<sup>注 55</sup> (Heissa, hurtig でも Heida lustig でもなく、Heisa lustig)。でもやはりメロディが異なります (図 33)。



図 33 作曲者不詳「それ、愉快だ、おいらはハンス」

教授：助け舟を出そう。シュミットの論文をよく読んでみたまえ。

犬輔：アントーニオ・ロセッティ Antonio Rosetti (1750-92) (右図) の手稿譜「それ、愉快だ、おいらはハンス Heisa lustig, ich bin Hans」がドーナウエッシンゲンにあるんですね (図 34)。これは民謡を書き写した楽譜なんですか。シュミットはロセッティがエッティンゲン＝ヴァラーシュタイン公の音楽家であったことから、シュヴァーベン人のポピュラー音楽を体験する機会があったと述べています。確かにこれがモーツァルトの手本になったと言えそうです。

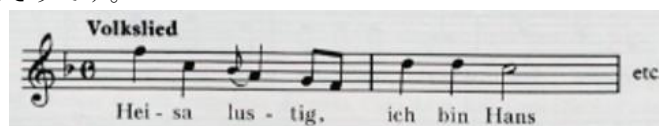


図 34 ロセッティ「それ、愉快だ、おいらはハンス」

鳥代：これだけ似ていると気持ちがすっきりします。

教授：ホッホラトナーは「民衆の間で作られた歌ではないが、後に民衆に採用された曲」の一つ「当時非常に人気のあったジングシュピールのひとつから来ている曲」の例として「それ、愉快だ、おいらはハンス、ご機嫌だ」を挙げている<sup>注 56</sup>。

犬輔：ロセッティの手稿譜はジングシュピールで使われた曲の可能性もあるということですね。



## (2) ディヴェルティメント 変ロ長調 K.287 フィナーレからアレグロ・モルト

鳥代：シュミットによれば「エミール・カール・ブリュムル Emil Karl Blümmel (1881–1925) はドイツ南部で非常に広く普及し、特にシュヴァーベンでは《猫のワルツ Mullewalzer》の名前で知られている人気のある曲を発見した。このダンスソングの楽しい詩は次の通りである。百姓女が猫をなくした／どこにいるのか分からない／隅々まで探します：／「猫ちゃん、どこにいるの？」 D'Bäure hot d'Katz verlore, / weiss net, wo sie ist, / sucht alle Winkele aus: / Mulle, wo bist?」として図 35 の民謡を挙げています。K.287 のフィナーレ冒頭（図 36）と比較しましょう。



図 35 ダンスソング「百姓女が猫をなくした」♪



図 36 ディヴェルティメント 変ロ長調 K.287 フィナーレからアレグロ・モルト ♪

犬輔：メロディラインは似ているけど、テンポにせわしさがありません。

教授：カール・マクスス・クリアー Karl Magnus Klier (1892–1966) は別の曲を挙げている<sup>注57</sup>。「しががない妻は教会献堂祭に行きたい、しががない夫も一緒に行きたい's Bettlweibl wollt Kirchfährten gehn, juchhe, juchhe! 's Bettlmandl wollt a mitgehn」というシュヴァーベンの民謡だ。《殴られた男 Der geschlagene Mann》という表題がつけられている（図 37）。



図 37 シュヴァーベン民謡《殴られた男》「しががない妻は教会献堂祭に行きたい」♪

鳥代：テンポも「快活に lustig」とあり、十六分音符が使われているところまでそっくりです。これは引用元としてぴったりです。

犬輔：まさか民謡の方がモーツァルトよりも後の時代の曲だということはないでしょうね。

教授：この曲は、早くも 1578 にカスパール・グランナー Caspar Glanner の『第一部／新しいドイツ音楽と／世界の小歌 Erster Theil Neuer Teutscher Geistlicher vnd Weltlicher Liedlein』の中にオリジナルの形で見る事ができる。主にアルプス諸地方、ドイツ中部、ボヘミアで配布されたという<sup>注58</sup>。

犬輔：では歌詞を訳しておきましょう。

表 2 殴られた男

's Bettlweibl wollt Kirchfährten gehn, juchhe, juchhe! 's Bettlmandl wollt a mitgehn, deididdum! a mitgehn, deididdidde!	しがない妻は教会献堂祭に行きたい、しがない夫も一緒に行きたい、ダイデイドゥルドゥム！ああ一緒に行きたい、ダイデイドゥルディドゥルデ！
's Bettlmandl muaß 'Haus schen bleibn, muaß Schüssel und Teller reibn, deididdum!...	しがない夫は家に留まり、ボウルと皿をこすらなければならない、ダイデイドゥルドゥム！...
Schüssel und Teller is nit gnua, Tisch und Bänk a dazua [Refrain]	ボウルや皿だけでは足りない、テーブルやベンチも [リフレイン]
Wia's Weibl von Kirchfährtn kimt: No, mein Mandl, såg, wärscht recht gschwind? [Refrain]	妻が教会から戻ってくると、「まあ、夫よ、どうしたの、あなたとても早かったわね」 [リフレイン]
I hâb gâr viel schon 'tân. Zwa Widl hâb i gsponna schon [Refrain]	「私はすでにたくさんのことを行い、すでに 2 本の糸を紡ぎました」 [リフレイン]
'n Bettlweibl wâr dâs nit gnua, schlägt aufn Männ tüchti zua [Refrain]	それだけでは飽き足らず、しがない妻は男を激しく殴りつけた [リフレイン]
's Bettlmandl fängt z'woanar ân, bin hält a gschlâgna Männ [Refrain]	しがない男は泣き始める、「私はただの殴られた男だ」 [リフレイン]
's Bettlweibl frâgt nix danâch, gibt eahm no ans aufs Dâch [Refrain]	しがない妻は何も聞かずに屋上でもう一発お見舞いする [リフレイン]
's Bettlmandl tuats 'n Richter klâgn, daß eahm sein Weib hât gschlâgn [Refrain]	しがない夫は妻が自分を殴ったと裁判官に訴える [リフレイン]
Der Richter sâgt: Gschiecht da recht! Warum bist a so a Weiberknecht! [Refrain]	裁判官は言う：あなたは正しく奉仕した！なぜそんなに女房の尻に敷かれたいのか！ [リフレイン]

deididdum は意味のない擬音語音楽表現で le tralala と同じ意味とのことです<sup>59</sup>。

鳥代：この不可解な歌詞について解説がありました。「この戯れ歌は“教会献堂祭”つまりお祭りに夫を伴わずにお参りに行きたかった極度に“解放された”女性のことを歌っており、彼女は彼に家庭内の多くの仕事や責務を与えた。彼女の観点からすると、これらは彼女の帰省時に満たされていなかったため、男性は罰せられた」<sup>60</sup>。面白い話ですね。

## 2.9 フルート四重奏曲 イ長調 K.298 第 2 楽章 (1786 後期/87、ヴィーン)

犬輔：ジョルジュ・ド・サン＝フォア Georges de Saint-Foix (1874–1954) は、メヌエットのトリオが古いフランスのロンドー「バスティアンは長靴を履いている Il a des bottes, des bottes Bastien」に他ならないことを証明しました<sup>61</sup>。実際には Il a des Bottes, Bastien! Polka brillante sur l'air anglais という二拍子のクラヴィーア曲がフランス国立図書館にあります<sup>62</sup>。



図 38 古いフランスのロンドー「バスティアンは長靴を履いている」



図 39 フルート四重奏曲 イ長調 K.298 第 2 楽章

鳥代：またしても拍子が異なりますが、確かに骨格は同じです。ヤロスラフ・ポハンカ Jaroslav Pohanka (1924–64) による新全集の序文では「モーツァルトがフランスの古いロンドーを編曲したもの」<sup>63</sup>という表現を使っています。

## 2.10 クラヴィーア・ソナタ イ長調 K.331 (1783 説、早くて 1780 夏説、ヴィーン/ザルツブルク)

犬輔：ハインリヒ・リーチュ Heinrich Rietsch (1860–1927) は 1913 に次のように述べています<sup>64</sup>。

「クルト・ラッタイ Kurt Rattay によって出版されたオストラッハの歌 Ostracher Liederhandschrift の写本 (1911) の「正しいライフスタイル Righte Lebensart」(図 40) とアウクスブルガー・ターフェルコンフェクトの「白から生きる Von der Weiß zu leben」(図 41) という表題の下には同じ詩「喜びなさい、私の心よ、痛みなど考えず Freu dich mein Herz, denk an kein Schmerz」が掲載されており、メロディが密接に関連している。私は他のところで、ターフェル・コンフェクトの作曲法を美しいオストラッハのメロディの下絵として説明した。これを正当化する理由は (キーが偶然似ているということは別として)、始まりと中間と終わりの終止が似ていること、そして最後から 3 番目の小節で g"までピッチが増加していることである。どちらの場合でも、音楽では顕著なオフセット強調 verzag

nicht (絶望するな) が見られる。オストラッハ版への変更は主に 2 つのぎこちない繰り返し (3/4 小節と 11/12 小節) を削除し、1 回目は次に低いピッチでの繰り返しに、2 回目はさらに自由な同等の繰り返しに置き換えている。このバージョンだけが、より一般的な評価を主張できる」。(図 40 と図 41 の譜例はシュミットの論文から引用します)

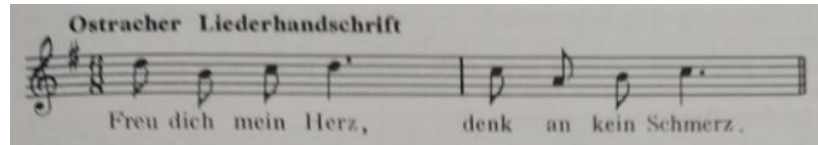


図 40 オストラッハの歌「正しいライフスタイル」

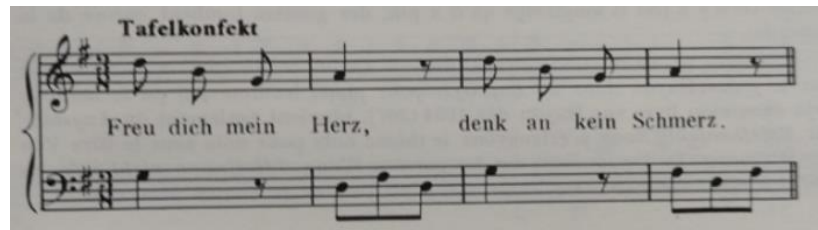


図 41 ラートゲーバー「白から生きる」♪

そして「前述の曲の演奏に軽いピアノの背景を提供するために、私は中音を横たわせた下三度のシンプルなベースを思いついた。これにより、アイデアのつながりが再び確立され、ますます強固になり、私はこのメロディの中にモーツァルトの変奏曲テーマの源を見ることができた。イ長調に移調され、指定された倍音アンダーレイが提供されると、次のようになる (図 42)」と続けます。補助線を引いて幾何の問題を証明するような手法ですが、音楽でもありうるんですね。



図 42 オストラッハの歌「正しいライフスタイル」を移調し和音付けしたリーチュ版

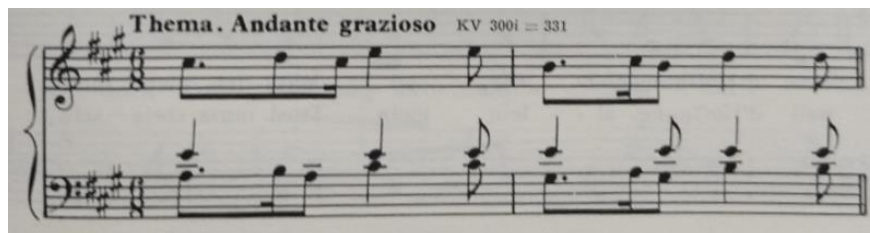


図 43 クラヴィーア・ソナタ イ長調 K.331 第 1 楽章主題 ♪

歌詞を訳しておきましょう。「喜びなさい、私の心よ、痛みなど考えず、笑いと冗談の中で生きてください。ただ良い勇気を持ち、最善を望み、物事がどんどん悪くなくても絶望しないでください。Freu dich mein Herz, denkt an kein Schmerz, leb und lass leben in Lachen und Scherz. Habnur gut Mut, hoffe das Gut', verzag nicht, wanns schlimm und schlecht hergehen tut.」



鳥代：その先を続けましょう。「モーツァルトのクラヴィーア・ソナタ変奏主題 イ長調 K.331 との関連性は疑いの余地がない。最初の 4 小節は、一度聞いたものを再現するとき起こりやすい変化のみを示しているが、モーツァルトがここで意図的に修正を加えた可能性は排除できない。少なくとも 1 小節目か 2 小節目後半の e か d が前半ですでに予想されていないのは改良点である。付点リズムが 3 小節目から最初の 2 小節に移動したという事実は、この最初の変更の結果として解釈できる。さらに、適切に構造化された変奏主題を得るために、モーツァルトは曲の幅を広げる必要があった。最初の 4 小節以降は曲のように続くのではなく、最初に戻って 8 小節の前半部分になる。彼は真にモーツァルト風のひねりを加えて第 2 部を開始し、次にテーマを再び取り上げ、曲と同じように主音の高音オクターブまで音を上げて終わりに至らせる（3 つのメロディはすべて、この上昇する音で交わる）。モーツァルトとオストラッハの旋律は、全体として、少なくともアウグスブルクとオストラッハの旋律と同じくらい互いに近い。そして、まったく異なる 2 つの作品を見るのは刺激的である。ターフェル・コンフェクトの歌とモーツァルトのクラヴィーアのテーマは、オストラッハの調べの中でつながりを見出している」。もしそうであれば、モーツァルトはかなり想像力豊かに引用したということになると言えるでしょう。

大輔：ヘルマン・アーベルト Hermann Abert (1871–1927) は「南ドイツの民謡 (図 40) と、7 歳のモーツァルトがパリで作曲したヴァイオリンとクラヴィーアのためのソナタ ト長調 K.9 の第 1 メヌエット (図 44) との依存関係にリーチュが触れていない」と異義を唱えています。しかしながら、作品の後半部分は、問題の曲のメロディから完全に離れていることは認めざるを得ない」とも述べています<sup>注 65</sup>。

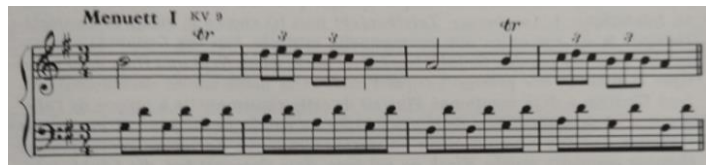


図 44 ヴァイオリンとクラヴィーアのためのソナタ ト長調 K.9 の第 1 メヌエット ♪

教授：その後の研究者の発言を紹介しておこう。『モーツァルト全作品事典』の K.331 の項を執筆したチャールズ・ストーニ Charles Sutton は「主題はチェコの民謡《Hořela líps, hořela》で、ドイツ語の歌詞『わが心は喜び、苦しみを忘れ Freu dich, mein Herz, denk' an kein Schmerz』を付けて歌われることもある」と書いているが、日本版の注釈者の井出紀久子によれば「上記にあるドイツ語を歌詞とした民謡と第 1 楽章の主題との関連は、ハインリヒ・リーチュ (1912–13) が最初に指摘し、アーベルトの評伝でも言及されているが、この説はすでに受け入れられなくなって久しい。リーチュの引用した譜例は K.331 の主題との類似性が非常に限定的であるだけでなく、同一の歌詞が別の旋律で歌われ、またその逆も行われることが珍しくない民謡の同定には大きな問題をともなうからである。なお、リーチュも触れていないチェコ民謡との関連は、主要な研究書のいずれにも言及がなく、不明である」と述べている<sup>注 66</sup>。確かにチェコの民謡「シナノキが燃えていた、燃えていた Hořela lípa, hořela」は Youtube で聴く限り全く無関係の曲である<sup>注 67</sup>。一方、ターフェル・コンフェクト版、オストラッハ版は共に類似性が限定的であり、直接の引用ではないかもしれない。しかし、さらにより近似の異版が見つかるかも知れない。したがって直接的に関連するような別の民謡が現れたならまだしも、代案のない現状では、この説を排除するのは時期尚早と思われる。

## 2.11 ディヴェルティメント《ロービニヒ》ニ長調 K.334 (1779–80、ザルツブルク)

鳥代：シュミットによれば「この作品の〔第 2 楽章〕変奏曲のテーマ (図 46) は、モーツァルトの新しいジョークであり、「彼に万歳、彼に万歳、万歳三唱！ Hoch soll er leben, hoch soll er leben, dreimal hoch!」(図 45) は大衆の平凡な拍手喝采を少し偽装したものである。〔中略〕この暗示から、このスコアはナンネルの誕生日の余興と同様に、ロービニヒ家の誕生日のお祝いを目的としていたことが分かる」と述べています。この歌は今でも誕生日の歌として歌われています。

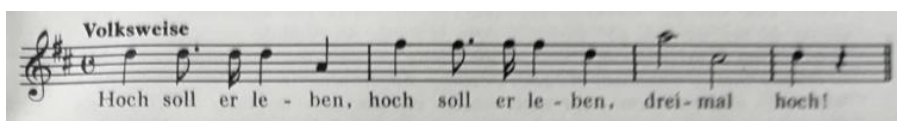


図 45 誕生日の歌「彼に万歳、彼に万歳、万歳三唱！」 ♪

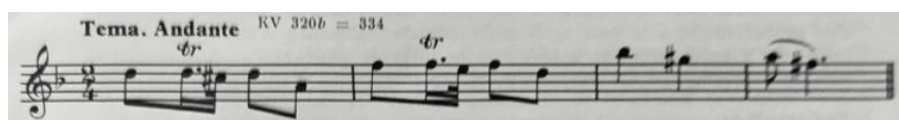


図 46 ディヴェルティメント《ロービニヒ》ニ長調 K.334 第 2 楽章主題 ♪

犬輔：蛇足だけど、ぼくは《コシ・ファン・トゥッテ》K.588 の第 2 幕フィナーレの六重唱「すべてを正しい方向に導く人は幸運です Fortunato l'uom che prende ogni cosa pel buon verso」（図 47）が似ていると思います。こちらは誕生日とは無関係ですが。



図 47 《コシ・ファン・トゥッテ》K.588 の第 2 幕フィナーレの六重唱 ♪

## 2.12 二幕のドイツ語オペラ《魔笛》K.620 から「恋人か女房が」（1791 春-9.28、ヴィーン）

鳥代：《魔笛》K.620 の「恋人か女房 Ein Mädchen oder Weibchen」が参照したとされる民謡に関しては従来から様々な説が齎されてきました。まず、モーツァルトの曲（図 48）を示し、そして以下に類似の民謡を列挙していきましょう。



図 48 二幕のドイツ語オペラ《魔笛》K.620 から「恋人か女房が」 ♪

### (1) ドレッツェル「神に心を捧げる人は誰でも Wer Gott sein Herz ergiebt」

犬輔：コルネリウス・ハインリヒ・ドレッツェル Cornelius Heinrich Dretzel (1697-1775) 著『福音派シオンの音楽的ハーモニー Des Evangelischen Zions Musicalische Harmonie』（1731）の「キリスト教徒の日々の営み Vom Christlichen Leben und Wandel」という章に掲載の楽譜（図 49）<sup>注 68</sup>は最初の 4 小節がそっくりです。このことは従来モーツァルト文献では指摘されたことがなかったようです。何故なのでしょう。



図 49 ドレッツェル「神に心を捧げる人は誰でも」

教授：この曲のことはどの二次文献で言及されていたのかね。

犬輔：実は K.25 関連の民謡調査の段階で、フロリモンド・ヴァン・デュイセ Florimond van Duyse 『オランダの古い歌 Het oude Nederlandsche lied』第 2 集（1905）の《ヴィレム・ヴァン・ナッサウ》の類似曲に関する譜例の中から見つけたのです<sup>注 69</sup>（確かに図 1 と似ています）。そこには「冒頭は完全にモーツァルトの《魔笛》（ヴィーン、1791）の「恋人か女房が」と一致している」と書かれていました。

鳥代：ヨハネス・ツァーン Johannes Zahn (1817-95) が編纂した『ドイツのプロテスタント賛美歌のメロディ Die Melodien der deutschen evangelischen Kirchenlieder』 Vol.III (1890) にも“ツァーン 5432”として引用されていて<sup>注 70</sup>、そこには「モーツァルトの《魔笛》と比較せよ」と書かれています。

教授：プロテスタントの曲だからモーツァルト学者の調査対象から漏れてしまったとしか考えられないが、言及したモーツァルト学者がいることを我々が知らないだけかもしれないのでこれ以上の発言は慎んでおこう。

### (2) 「恋人か女房が」の引用元候補とされてきたその他民謡

#### (2.1) 「泉の水が流れていれば Wenn alle Brunnlein fließen」

鳥代：この民謡が「恋人か女房が」と似ているということを昔どこかの解説書で読んだことがあります。

犬輔：ぼくがモーツァルトと民謡の接点に関心を持つきっかけとなったのもこの民謡名を挙げていた解説です。でもなかなか本格的調査には結びつかず、今日になってしまいました。

教授：それも無理はない。譜例付きの解説書は珍しいだからだ。日本だけではなく（読者の要望もあってか）本の記述は言葉だけで完結するように書かれてきた。だが、今や PC で楽譜が書けるし、ネットとのリンクで音源へのアクセスもできるのだ。

鳥代：では譜例を挙げましょう。この曲はドイツのラブソングで、その一部は 16 世紀にさかのぼり、フリードリヒ・シルヒャー Friedrich Silchers (1789–1860) の『ツォフィンガー・フェライン Zofinger Verein』(1855) に収録された曲 (図 50) <sup>注 71</sup> が現在まで歌われていることです。



図 50 民謡「泉の水が流れていけば」(1855) ♪

犬輔：その年代より前の楽譜がないとモーツァルトが引用したとは言えないですが…

教授：その通り。この曲は歌詞、メロディを含めてレオンハルト・クレバー Leonhard Kleber (1495–1556) によって 1520 に記録されているが、アクセスできる 1536 の譜例 (図 51) を見ると今とは全く異なるメロディなのだ <sup>注 72</sup>。

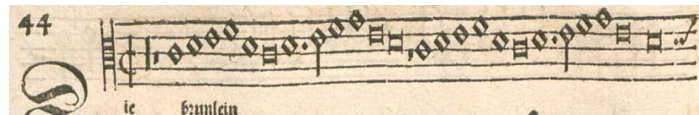


図 51 「泉の水が流れていけば」(1536)

犬輔：ということは、新版「泉の水が流れていけば」(図 50) は「恋人か女房が」を参考にして旧版「泉の水が流れていけば」(図 51) を当代風に編曲したものなのかもしれません。

## (2.2) 「森の水くみ男が求婚した Es freit ein wilder Wassermann」

犬輔：この民謡の名前を知ったのも上記と同じ頃でした。この曲 (図 52) <sup>注 73</sup> はいつから歌われていたんだろう。



図 52 民謡「森の水くみ男が求婚した」 ♪

鳥代：19 世紀初頭から北ボヘミアに伝わるといえますから、これも「恋人か女房が」より新しい民謡ですね。

## (2.3) 「常に忠誠心と正直さを実践せよ Üb immer Treu und Redlichkeit」

鳥代：ルートヴィヒ・ハインリヒ・クリストフ・ヘルティ Ludwig Heinrich Christoph Hölty (1748–76) によって 1775 に「田舎の老人は息子に Der alte Landmann an seinen Sohn」というタイトルで書かれた詩に曲を付けたものです (図 53) <sup>注 74</sup>。



図 53 「常に忠誠心と正直さを実践せよ」 ♪

犬輔：「恋人か女房が」を知っている人が曲を付けたんでしょう。

## (2.4) 「俺は狩人だ Ein Weidmann bin ich eben」

犬輔：《敬虔な狩人 Der fromme Jäger》とも呼ばれるこの民謡はフランツ・ヴィルヘルム・フォン・ディトフルト Franz Wilhelm von Dittfurth (1801–80) の『17&18 世紀のドイツの民謡および社交歌 Deutsche Volks- und Gesellschaftslieder des 17. und 18. Jahrhunderts』(1872) に掲載の楽譜 (図 54) です <sup>注 75</sup>。



図 54 民謡「俺は狩人だ」

鳥代：本のタイトルからは 19 世紀の曲ではないということになりますが、「恋人か女房が」(1791) より前の曲であるという手掛かりはありません。



## (2.5) 「ラ・マルセイエーズ」との類似？

鳥代：ヴィルヘルム・タッペルト Wilhelm Tappert (1830-1907) の『遍歴するメロディ Wandernde Melodien: Eine musikalische Studie』(1889) 注<sup>76</sup> を読んでいたら次の記述に出会いました。「作曲家のグリゾン Jean-Baptiste Lucien Grisons (1746-1815) は、ある種の愛国的な続編として、マルセイエーズの音楽が非常に巧みかつ効果的に使用された《自由への捧げもの。レチタティフ、合唱団、大規模オーケストラの伴奏によるステージ Offrande à Liberté》という作品を作曲した。その曲はラシーヌの詩をルジェ・ド・リールのメロディのまったく当てはまらないところに組み込んだものであった (図 55)」注<sup>77</sup>。



図 55 グリゾン《自由への捧げもの》

そしてこう続けます。「この冒頭は、誰もがモーツァルトの《魔笛》の盗作についても語る（そして、より大きな確信がある！）ことができるような形で書かれている」。

犬輔：タッペルトはこうも言っていますね。「私はかつて、ルジェ・ドゥ・リールを単なる追従者、つまり盗作であると説明したくなったことがある。なぜなら、ドイツの《強盗隊長リナルド・リナルディーニ》のリナルドの歌 (図 56) の終わり部分 (図 57) は、ラ・マルセイエーズの始まり「行こう、祖国の子供たちよ Allons enfants de la patrie」(図 58) に相当するからである」。ここでリナルドの歌とはクリスティアーヌ・アウグスト・ヴルピウス Christian August Vulpius (1762-1827) の小説《強盗隊長リナルド・リナルディーニ Rinaldo Rinaldini, der Räuberhauptmann》(1799) のリナルドの歌詞「森の暗いところで In des Waldes finstern Gründen」による民謡 (図 56) 注<sup>78</sup> のことです。

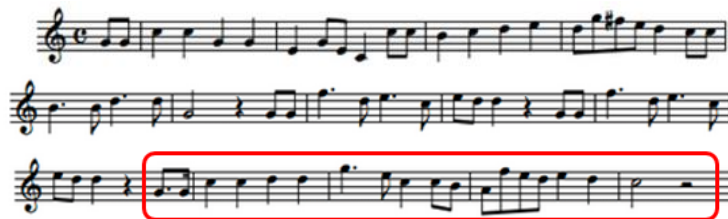


図 56 民謡「森の暗いところで」



図 57 民謡「森の暗いところで」終結部

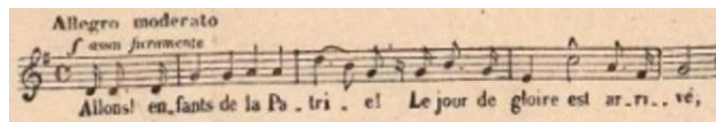


図 58 ラ・マルセイエーズの開始部

鳥代：年代上はラ・マルセイエーズの方がリナルドの歌より先ですので、ルジェ・ドゥ・リールが盗作者であるというのはタッペルトの冗談ですが、これに準じてタッペルトは、ラ・マルセイエーズの方が「恋人か女房が」より後であることからルジェ・ドゥ・リールをモーツァルトの追従者、つまり盗作であると言うかと思いましたが、言ってはいません。

教授：図 57 における四分音符が 4 つの小節は“遍歴するメロディ要素”であり、あちこちに出て来るが、お互いに密接に関係しているとは言えない曲同士であると捉えるしかないのではないかな。

## (2.6) 「古いクラヴィーア教本からの練習曲」の教えるところ

教授：卓近な例で確認してみよう。タッペルトの『遍歴するメロディ』に掲載の「16. 古いクラヴィーア教本からの練習曲」(図 59) について議論してみたい。

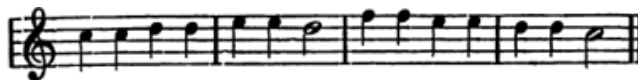


図 59 「古いクラヴィーア教本からの練習曲」

鳥代：四分音符が 4 つの最初的小節だけでなく、最後のドを除けばすべての音が「恋人か女房が」のメロディラインと一致します。これも引用元の候補となりうるのでしょうか。

犬輔：あっ、図 59 は「日の丸の旗」と全く同じ動機（2 小節）で始まっています。「日の丸の旗」は「きらきら星変奏曲」K.265 の主題とも似ていましたが<sup>注79</sup>、図 59 と「日の丸の旗」との類似性にそれ以上の説得力があります。

教授：ではその上で何が言えるかね。

犬輔：動機の展開の仕方が異なります。こちらはすぐに下行が続きますが、「日の丸」の方はさらに上行が続いてから下行します。

教授：引用関係はどうだろう。

犬輔：引用しているとは言えません。

教授：それは何故かね。

犬輔：「日の丸の旗」の作曲者、岡野貞一がこの練習曲を知っていたとは考えられないからです。

鳥代：その説明は説得力がないわね。引用の特定が不可能だというのが適切ではないかしら。その場合は何故似ているかを考えた方がいいわ。両曲ともクラヴィーア、あるいは歌の初心者向けの曲であるので、キー音から始めて、二音ずつの上行で順次に進んでいくという簡単な動機にしているというだけのことでしょ。

教授：曲の一部でも同じであると、曲は引用関係にあるように見えてしまう。だが、民謡風に作曲すれば、似た民謡が見つかるというだけのことであり、その場合には双方は赤の他人、すなわち似ているのは他人の空似であると言える。

## 2.13 2 幕のドラマ・ジョーコ・ソ《ドン・ジョーヴァンニ》K.527 からツェルリーナの「薬屋の歌」（87.3-87.10.28、ヴィーンとプラハ）

犬輔：民謡からの引用ではないのでピックアップしないでおこうと思っていましたが、気になることがあるので、ご意見を伺いたくなりました。ツェルリーナの「薬屋のアリア」（図 61）です。この引用元とされるのは『ロッジでの使用のためのメロディ付きの歌 Liedern mit Melodien zum Gebrauch der Loge』（ハレ、1784）に掲載されている<sup>注80</sup>という「もし僕が鳥ならば Wenn ich ein Vöglein wär'」という歌（図 60）です<sup>注81</sup>。フリーメイソンの歌集ですから民謡のカテゴリーではないわけです。



図 60 「もし僕が鳥ならば」 ♪



図 61 《ドン・ジョヴァンニ》K.527 からツェルリーナの「薬屋の歌」 ♪

鳥代：似ているのは最初の 2 小節だけですね。元が民謡なら「他人の空似」と言うでしょうが、フリーメイソンの歌集ということになるとモーツァルトとの関係が深いということから言下に「他人の空似」というのは憚られるということなのですね。

教授：付け加えて言うと《ドン・ジョヴァンニ》の直前に作曲された《音楽のさいころ遊び》ハ長調 K.516f にもこの 2 小節のメロディが使われている（図 62）<sup>注82</sup>。

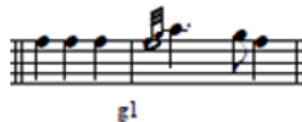


図 62 《音楽のさいころ遊び》K.516f/g1

犬輔：フリーメイソンの歌集からというだけでは「他人の空似」ではないと言い切れなかったけど、モーツァルトがこの 2 小節にこだわった証拠がそのように揃っているから、「他人の空似」ではないと言い切れそうです。

教授：「もし僕が鳥ならば」は日本では童謡「夜汽車」（勝承夫訳詞）になっており<sup>注83</sup>、元々は民謡であったと考えられている。それがフリーメイソンの歌集に取り入れられたのだ。

犬輔：モーツァルトが民謡の方から引用したかもしれないとしても、モーツァルトの 2 小節へのこだわりがあることに変わりないので、ぼくの結論は変わりません。

鳥代：ところで、わたしにも今回取り上げようとしなかった曲があります。それらは民謡名が明記されているので、引用元に関しては疑う余地がないと考えたからです。すべてフランス民謡のようです。でも、本当に問題がないのか、心配になってきました。

教授：今からでもよい。細大漏らさず挙げてみなさい。ケツヒエル番号順にならなくなるが気にしないことだ。

## 2.14 「きれいなフランソワーズ」によるクラヴィーアのための 12 の変奏曲 変ホ長調 K.353 (81-82、ヴィーン)

鳥代：クラヴィーアのための 12 の変奏曲 変ホ長調 K.353 (図 64) の引用元は曲名にあるとおり《きれいなフランソワーズ La belle Françoise》という表題の民謡だと思われます。

犬輔：おかしいですね。そのような民謡は調査しても見当たりませんが…

教授：そうだね。民謡の表題からではなかなか見つからない。ヒントをあげよう。歌い出しが「ではさようなら、フランソワーズさん Adieu donc, Dame Françoise」という民謡だ。

鳥代：ありました。ジャン＝ベンジャマン・ド・ラボルドの『歌の選集』(1773) に伴奏付きで載っています (図 63) <sup>注 84</sup>。



図 63 「ではさようなら、フランソワーズさん」 <sup>♪</sup>



図 64 クラヴィーアのための 12 の変奏曲 変ホ長調 K.353 <sup>♪</sup>

教授：この歌詞と旋律は既に『社交界の楽しみ Plaisirs de la Société』(1761) <sup>注 85</sup> に載っているという。モーツァルトがどの歌集から引用したかは不明だが、パリで知ったのであろうことは間違いない。

犬輔：『フランスの歌手たち、または歌、アリエット、ヴォードヴィル、およびその他の厳選された詩の選集』(1760) <sup>注 86</sup> においては曲のタイトルが「ではさようなら、フランソワーズさん」ですが、違う歌詞、違うメロディです。それ以外の歌集にも曲のタイトルが「ではさようなら、フランソワーズさん」であっても別の歌詞のものがたくさんありました（これらにメロディは掲載されていません）。でも《きれいなフランソワーズ》という表題が見当たらないのは不思議なことです。

鳥代：ド・ヴィゼヴァ及びド・サン＝フォアがこの主題は「マルブルーの出立と死」というフランスの＜ポプリ＞の一つであると言っているのを見つけました <sup>注 87</sup>。ポプリ（混成歌）とはヴォードヴィル（軽歌劇）のことと思われるので調べてみると、おそらくヴォードヴィル《奴隷商人 Le Marchand d'esclaves》(1784) <sup>注 88</sup> の中で歌われた「マルブルーは戦争へ行く」あるいは「無敵のマルブルーの死と護送船団」と題されたアリエットを指していると思われます <sup>注 89</sup>。でも残念ながら全く異なるメロディでした。

犬輔：あっ、他のヴォードヴィルを調べたら、「ではさようなら、フランソワーズさん」が歌われたヴォードヴィルはたくさんあって、《小さな家 La Petite Maison》(1757)、《ペトリーヌ Pétrine》(1759)、《愛の怒り La Rage d'amour》(1778)、《ハーレクイン人形商人または現代のピグマリオン Arlequin Marchand de poupées ou le Pygmalion moderne》(1779)、《クリストフとピエール＝リュック Christophe et Pierre-Luc》(1780)、《良い兄弟 Le Bon Frère》(??) が挙げられています。ただし、このサイト <sup>注 90</sup> ではメロディとして図 63 と同じものだけが参照されていますが、本当にそうなのかは慎重に捉える必要があります。

教授：では《きれいなフランソワーズ》という通称がどこから出たのかを押さえておこう。まずはモーツァルト関連文献での叙述からだ。

犬輔：遡っていくと、ケッヒェル初版 (1862)、オットー・ヤーン『W.A.モーツァルト』第 4 巻 (1859) ですでに通称《きれいなフランソワーズ》で呼んでいます。しかし、アルタリアの K.353 初版 (1786) には Variations pour le Clavecin ou Piano-forte par W. A. Mozart No.2 とあるのみで通称はありません <sup>注 91</sup>。

教授：モーツァルト生前の出版譜はいくつかあるからそれらを調べてみてはどうか。



鳥代：あったわ。ル・デュックから発行された K.353 第 2 版（1786）が表紙には Six airs variés pour Clavecin ou Fortepiano par Amédée Mozart Opera 18 とありますが、楽譜の主題の上（図 65）には《きれいなフランソワーズ》と書かれているのです<sup>注 92</sup>。



図 65 クラヴィーアのための 12 の変奏曲 変ホ長調 K.353 ル・デュック第 2 版（1786）

教授：このようにさりげなく書かれているということは、当時はこの通称で人口に膾炙していたであろうということでもある。なお、《きれいなフランソワーズ La belle Française》の Française の綴りは古く、現代では Française であると言<sup>注 93</sup>、あるいは《きれいなフランソワーズ》（きれいなフランス女）と括弧付きで異訳を付しているが<sup>注 94</sup>、歌詞からそのような説は受け入れがたい。歌詞を翻訳しておこう。

表 3 「ではさようなら、フランソワーズさん」第 1 節

Adieu donc Dame Française pour qui j'ai tant soupiré je m'en vais désespéré le Pouliailler de Pontoise me doit enmener demain si ton cœur Dame Française si ton cœur n'est plus humain	ではさようなら、フランソワーズさん、 誰のためにこんなにため息をついたんだろう、 僕は絶望して去ります。 プーライエ・ド・ポントワーズが 明日僕を連れて行くことになっています、 もしあなたの心が、フランソワーズさん、 もしあなたの心が人情を持っていないのならば。
--	---

ここで Dame は女性の敬称で、既婚かどうかは問わない。またプーライエは小文字で始めれば鶏小屋のことであるが、ここではおそらく固有名詞化した名前であろう。


## 2.15 「羊飼いの娘セリメヌ」によるクラヴィーアとヴァイオリンのための 12 の変奏曲ト長調 K.359 (81.6、ヴィーン)

鳥代：この曲（図 67）はモーツァルトの自筆譜に「アリア《羊飼いの娘セリメヌ》による変奏曲 Variationi sopra l'aria la Bergère Célimène & C.」とあります。この歌詞は古くからあるようですが、曲が異なっていました。そこでシモーヌ・ヴァロン Simone Wallon (1918–2001) がアントワヌ・アルバネーズ Antoine Albanese 編纂の『同声の二重唱、ロマンス、ブリュネット、アリエット第 5 集』（1770）<sup>注 95</sup> にブリュネット（図 66）として同じメロディの楽譜が載っているのを突き止めたのです。



図 66 「羊飼いの娘セリメヌ」（1770）



図 67 クラヴィーアとヴァイオリンのための 12 の変奏曲ト長調 K.359 

犬輔：ブリュネットというジャンルはどういうものなんですか。

教授：フランス民謡に《美しい羊飼いティルシス Le beau berger Tircis》という曲がある。歌詞に褐色の髪を持つ女性 brunette が登場し、歌詞、曲ともに様々な異版がある。その中にタイトルをブリュネットとしたものがあることもあって、この歌のジャンルをブリュネットと呼ぶようになり（おそらく 1703 以降）、流行した。ブリュネットはエール・タンドル air tendre（やさしい歌）とも呼ばれる。このジャンルは 18 世紀後半にはロマンス Romance（叙情的な歌）に取って代わられる<sup>注 96</sup>。

鳥代：分かりました。では「羊飼いの娘セリメヌ」の歌詞を翻訳しておきましょう。

表 4 「羊飼いの娘セリメヌ」(1770)

La bergère Célimène Dans nos bois s'en va chantant Dieux que l'on souffre de peine Quand'on aime un inconstant S'il a sçu briser sa chaîne Nen puis-je pas faire autant.	羊飼いの娘セリメヌは 歌いながら森へ去って行く 神様、気まぐれな人を愛するとき 我々は痛みを感じるものだ。 もし鎖を断ち切る方法をご存知なら 僕もそのようにできないだろうか？
Les oiseaux dans cette plaine, Font silence en l'écoutant. Et jusqu'à perte d'haleine, Tour a tour, vont répétant, S'il a sçu briser sa chaîne; N'en puis-je pas faire autant?	この平原の鳥たちは、 彼の話を聞くと沈黙する。 そして息が切れるまで、 鳥たちは順番に、こう繰り返す。 もし鎖を断ち切る方法をご存知なら 私もそのようにできないでしょうか？
Non, je ne puis me deffendre Des charmes de ce berger. Ma raison, il faut se rendre; Et bien qu'il ait sçu changer, Mon coeur ast encor plus tendre Que son esprit n'est léger.	いいえ、私はこの羊飼いの若者の魅力から 身を守ることできません。 私の理性は放棄されなければなりません。 そしてそれが変わる方法を知っていますが 私の心はまだ 優柔不断なのです。

犬輔：第 1 節は羊飼いの若者が歌い、第 2 節は鳥が歌い、第 3 節は羊飼いの娘セリメヌ自身が歌うという構成なんですね。ややこしいです。

鳥代：なお、曲の最初がドドレレミミファファと 2 音符ずつ上行していくのは「恋人か女房が」と類似していることも指摘しておきましょう。

## 2.16 「泉のほとりで」によるクラヴィーアとヴァイオリンのための 6 つの変奏曲ト短調 K.360 (81 初夏、ヴィーン)

鳥代：この変奏曲の引用元の民謡は「ああ、私は恋人を失った Hélas, J'ai perdu mon amant」であるとケツヒェル第 6 版に至るまで長らく解説されてきました。でもモーツァルトの自筆譜にもアルタリアの初版にも主題の出典を示すタイトルは示されていません。そこで何時からそう言われて来たのか、わたしなりに調べてみました。すると最も早い資料は『音楽文献または一般的なハンドブック』(1817) 注<sup>97</sup>の「1815 年末までに印刷された音楽のリスト」に記載の Mozart (W.A.) 6 Var. (Hélas j'ai perdu mon Amant.) No.6. Wien, Cappi 40 Xr, (No.11.) Offenb. André 30 Xr.でした。

犬輔：でもそのタイトルの民謡は誰も探し出せなかったらしいですよ。「シモーヌ・ヴァロンの調査により、フランスには Hélas という歌詞の歌は存在しないことが明らかにされた」と言われています注<sup>98</sup>。

鳥代：そこでド・サン＝フォアがアルバネーズの編纂した『伴奏付きのアリエット集第 3 集』(1767) 注<sup>99</sup>に「泉のほとりで Au bord d'une fontaine」の歌詞で収められている歌 (図 68) と変奏曲 (図 69) が同じメロディであることを発見したのですね。



図 68 「泉のほとりで」(1767)

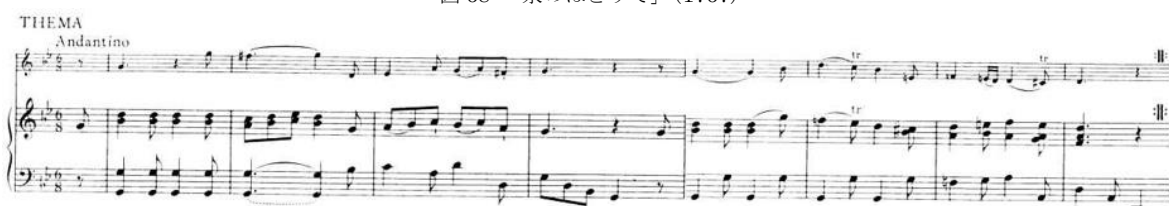


図 69 クラヴィーアとヴァイオリンのための 6 つの変奏曲ト短調 K.360

犬輔：歌詞の翻訳はばくにお任せください。

表 5 「泉のほとりで」(1767)

<p>Au bord d'une Fontaine Tircis brûlant d'amour, Contoit ainsi sa peine Aux Échos d'alentour: *Félicité passée, Qui ne peux revenir, Tourment de ma pensée! Félicité passée, Que n'ai-je en te perdant, perdu le souvenir!</p> <p>J'aimois la jeune Annette, J'étois tous ses plaisirs; Une flamme secrète Unissoit nos desirs: *refrain</p> <p>Il vaut mieux, disoit-elle, Mourir que de changer: Cependant l'Infidelle Aime un autre Berger. *refrain</p> <p>C'étoit sur ce rivage, A l'ombre de ce Bois, Qu'avec moi la Volage Se cachoit autrefois: *refrain</p> <p>Un autre Amour l'appelle Loin de ces lieux charmans Où je goûtai près d'elle De si tendres momens: *refrain</p> <p>O! jours dignes d'envie Je ne vous verrai plus! Au Printems de ma vie Vous êtes disparus. *refrain</p>	<p>泉のほとりで、 ティルシスは愛に燃えて、 周囲のエコーたち[森のニンフ]に 悲しみをこう語る。 *至福は過ぎ去り、 もう戻らない。 僕の想いの苦しみよ！ 至福は過ぎ去り、 君を失い、思い出を失って寂しい！</p> <p>僕は若いアネットを愛していた、 僕は彼女の喜びのすべてだった。 秘密の炎が 僕たちの願いを結び付けた。 *以下繰り返し</p> <p>彼女は言った 変わるよりは死んだ方がましと。 だが、浮気者は 別の羊飼いを愛す。 *以下繰り返し</p> <p>この岸辺で この森の木陰で 気まぐれな女性がかつて 私と一緒に隠れた。 *以下繰り返し</p> <p>別の愛が彼女を連れ去るのだ。 私が彼女のそばで過ごし 優しいひとときを楽しんだ 魅力的な場所から。 *以下繰り返し</p> <p>おお！ 羨望に値する日々には もう会うことはない！ 人生の春に お前は姿を消した。 *以下繰り返し</p>
--	---

鳥代：面白い詩ですね。この詩は 17 世紀に、リフレインは 16 世紀にまで遡り、1703 にはバラールによって別の旋律を付して出版されているといいます<sup>注 100</sup>。

犬輔：オリジナルの歌がホ短調、モーツァルトの変奏曲がト短調というのも歌詞の内容に沿っていると思われます。

鳥代：それもあって、わたしは《ああ、私は恋人を失った》という昔のタイトルの方が《泉のほとりで》をタイトルにするよりも曲の内容に相応しいと思います。

教授：個人の感想で終わらせるのではなく、資料的に話を進めて欲しい。まず「フランスには Hélas という歌詞の歌は存在しない」というのが正しいかどうか調査しなさい。

鳥代：探したところ Hélas という歌詞がありました。クリストフ・バラード著『ブリュネットまたは小さいエール・タンドレ第 1 巻』(1703)に歌い出しが「あなたは去るのですね、美しいクリメヌ Vous partez, belle Climene」という三重唱があり、その第 3 節が「ああ！あなたの憎しみにもかかわらず、もし私があなたにひざまずいて息を引き取ることができたら、私はどれほど嫉妬するのでしょうか？ Hélas! malgré votre haine, / Que je ferois de Jaloux, / Si je pouvois, Inhumaine, / Expirer à vos genoux?」という歌詞なのです<sup>注 101</sup>。

犬輔：またエール・ジャック・デュラン・ユスタシュ・マルタン・ド・ショワジー《シルフ：または、稀有な夫、アリエツを混ぜた自由詩と 3 幕の喜劇》(1778)には歌詞ではありませんが「ああ、私は恋人を失った Hélas, J'ai perdu mon amant」という科白が出てきます<sup>注 102</sup>。

鳥代：さらに「泉のほとりで」は《嘆き Complainte》(1605)あるいは《後悔 Les regrets》(1761)というタイトルで出版されていたことも分かりました<sup>注 103</sup>。

教授：では次に「タイトルが誤って伝承された経路は不明である」という解説に答えを提示できるかね。

犬輔：はい。曲の内容に相応しい幾つかのタイトル《嘆き》、《後悔》に加えて《ああ、私は恋人を失った》も存在したのでしょう。今ではモーツァルトの変奏曲にしか残っていませんが、



一時期の通称だった可能性があります。受容史を尊重すれば、K.360 の主題はタイトルが通称《ああ、私は恋人を失った》で、歌い出しが「泉のほとりで」というブリュネットであるというのが正しいと思われます。決して誰かが誤って伝えたということではありませんよ。

教授：一方で「もし私が恋人を失ったら Si j'ai perdu mon amant」(1768) という歌い出しのロマンスがある<sup>注104</sup>。この曲との関係をどう考えるかね。

鳥代：その歌詞も、いくつかあるメロディも、K.360 とは全く一致しません。また通称《ああ、私は恋人を失った》と語句が似ているものの、曲を混同して伝承されるほどの一致ではありません。したがってわたしも犬輔さんの結論に賛同します。

## 2.17 そのほかの曲と民謡

鳥代：以前に調査済のものとして、モーツァルトの作曲かどうかははっきりしない二つの作品、ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 K.271i フィナーレとパントマイムのためのバレエ音楽《レ・プティ・リアン》K.299b No.12 のガヴォットにおけるボヘミアのクリスマス・キャロル「ベツレヘムへ行こう」の引用があります。そこでは、器楽作品での民謡風・民俗舞曲風性格の払拭方法、作品の真正性などが議論されました<sup>注105</sup>。

犬輔：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 K.218 フィナーレ中間部の民謡風メロディに関してはミヒャエル・ハイドンの筆跡による《ヨハン・ルードルフ・チェルニーン伯爵のためのコントルダンス》K.269b No.1 との類似が指摘されましたが、さらにさかのぼって引用元と考えられる民謡の特定には至っていません<sup>注106</sup>。

## 3. まとめ

犬輔：今回はぼくが未解決のままでいた K.287 の「それ、愉快だ、おいらはハンス」がロッセッティの採譜によるメロディらしいこと、フィナーレは従来から言われてきた「百姓女が猫をなくした」ではなく、《殴られた男》からの引用である可能性が高いこと、K.620 の「恋人か女房が」には類似の曲が多くあり、そのとどめを刺すのがドレッツェル「神に心を捧げる人は誰でも」(1731) だったことが収穫でした。

鳥代：わたしはハフナー家の結婚式で K.250 に「ヤッカリ、ヤッカリ、梨の木を揺らせ、どうにも梨は落っこちない」を引用することで、モーツァルトから「両お父上がご存命であればさぞお喜びのことだったでしょう」というメッセージを贈ったということに感銘しました。

教授：その外の曲に関しては、本当に引用なのか、引用だとすればその意味は何なのか、分かったものもあれば、不明のまま残ったものもあった。それらをまとめてモーツァルトによる民謡の引用をカテゴライズして整理してみてもどうか。

犬輔：はい。民謡だけでなく他作曲家作品の引用も含め表 6 にしました。ただしあくまでも暫定的なまとめですので案としました。

表 6 モーツァルトによる引用の意味 (案)

引用の契機		具体例
作品の内容と関連 (聴き手が目的を特定できる)	ご当地への敬意表明	K.25, K.32
	誕生日の祝い	K.334
	記念日の祝い	K.72
	出身地への敬意	K.250, K.271i
	共通対象への讃歌	K.192
	聴き馴染みによる遊び	K.252, K.287/6
作品の内容・作曲手法と関連 (聴き手は目的を推定はできる)	弔意の表明	K.152, K.414, K.315g/4
	変奏曲の主題 (形式的?)	K.287/2, K.353, K.359, K.360
	パロディ (時代への批判?)	K.522
作曲手法と関連 (聴き手は目的を推定できない)	ポブリ (流行の取り込み?)	K.298, K.219
	盗用 (多忙による?)	K.118/16
無意識の引用 (具体的目的はない)	借用 (作曲アイデアとして?)	K.209a, K.527 「薬屋の歌」
	民謡風・舞曲風に作曲する場合	K.620 「恋人か女房が」
他人の空似 (引用とは言えない)	聴取者側の意識	K.581 のアラブ風メロディ
分類する基本データが不足	引用であるが目的不詳	K.132, K.216, K.218
	類似性の説得力が不十分	K.331

鳥代：一見して分かるのは異論が百出しそうということね。案にしておくのは賢明だわ。

教授：まだまだ未解決の問題は残っている。今後 AI を使って楽譜データの類似検索がもっと幅広くできるようになれば (現在の Music Finder、Identify Songs などは能力が限定的である)、一気に研究は加速するであろう。

注

- 注 1 : 「モーツァルトと民謡 (1) ——スコットランドの歌のスケッチ Sk1785a ——」 神戸モーツァルト研究会 第 310 例会 [∞](#)
- 注 2 : 「モーツァルトと民謡 (2) —— クラヴィーアのための 12 の変奏曲 ハ長調 K.265 の由来と受容 —— フランス起源のガヴォット・リズムについて」 神戸モーツァルト研究会 第 311 例会&第 312 例会 [∞](#)
- 注 3 : NMA IX/26: Variationen für Klavier, Kritischer Bericht (Fischer, 1962) [∞](#)
- 注 4 : Duyse, Florimond van (1905). Het oude Nederlandsche lied. Deel 2, p.1620 [∞](#)
- 注 5 : Wikipedia : Wilhelmus [∞](#)
- 注 6 : Wikipedia : 国歌の一覧 [∞](#)
- 注 7 : 前掲 Duyse (1905), p.1659
- 注 8 : 前掲モーツァルトと民謡 (1)
- 注 9 : 前掲モーツァルトと民謡 (2)
- 注 10 : Schmid, Ernst Fritz (1958). L'héritage souabe de Mozart in: Les influences étrangères dans l'oeuvre de W. A. Mozart: Paris, 10-13 octobre 1956 [∞](#)
- 注 11 : Schmid, Ernst Fritz (1948). Ein schwäbisches Mozartbuch (Reprint by Wißner-Verlag, 1998)
- 注 12 : Wikipedia : Auf der Mauer, auf der Lauer [∞](#)
- 注 13 : Mang, Theo & Mang, Sunhilt (Hrsg.) (2007). Der Liederquell. Noetzel, Wilhelmshaven, S. 714 f. (Wikipedia : Auf der Mauer, auf der Lauer の注釈 2 による [∞](#))
- 注 14 : モーツァルトのシュトラースブルク協奏曲について (その 1) ヴァイオリン協奏曲 ト長調 K.216 説の確定、神戸モーツァルト研究会 第 213 回例会 [∞](#)
- 注 15 : NMA IV/12/1: Kassationen, Serenaden und Divertimenti für Orchester · Band 1 (Günter Haußwald und Wolfgang Plath, 1970) [∞](#)
- 注 16 : Seiffert, Max (1908). Denkmäler deutscher Tonkunst, Zweite Folge: Denkmäler der Tonkunst in Bayern; Jahrg. IX/2: Ausgewählte Werke von Leopold Mozart (pp.138-153), Leipzig: Breitkopf und Härtel
- 注 17 : Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichniss sämmtlicher Tonwerke Wolfgang Amade Mozart's. Nebst Angabe der verloren gegangenen, angefangenen, übertragenen, zweifelhaften und unterschobenen Compositionen desselben. 3. Auflage, Ann Arbor 1947, Hrsg. von Alfred Einstein, Leipzig: Breitkopf und Härtel [∞](#)
- 注 18-1 : Eine Heimat für das deutsche Lied und Volkslied [∞](#)
- 注 18-2 : Alojado Lieder Archiv: S'isch no nit lang [∞](#)
- 注 19 : Alojado Lieder Archiv: Wenn die Hoffnung nicht wär' によれば「希望がなかったら」は 18 世紀初頭のシェヴァーベン民謡で、1737 年に初めて記録されたが、最近のメロディは 1816 年に記録されている」[∞](#)
- 注 20-1 : Haydn, Joseph (1800). Oeuvres complètes, (Vol.2, No.17, pp.76-85) Leipzig: Breitkopf und Härtel [∞](#)
- 注 20-2 : 前掲 NMA IV/12/1
- 注 20-3 : Gerlach, Sonja (2007). Joseph Haydn, Piano Pieces · Piano Variations, G. Henle Verlag の序文で「民俗学者は、19 世紀から 20 世紀初頭のザウシュナイダーの歌の数多くの変種を特定している。それらの旋律はハイドンの主題と構造が似ているが、旋律には顕著な違いがある」とし、K.32 に触れた後「ターフェル・コンフェクトは 2 人の作曲家のモデルであるはずはない」と述べている。
- 注 21 : Hochradner, Thomas (2004). Mozart und die Volksmusik, Über ein unentwegt populäres Thema, in: Prima la danza!: Festschrift für Sibylle Dahms, Königshausen & Neumann [∞](#) ; また前掲 Gerlach (2007) も「ハイドンとモーツァルトが使用したソースは、ウィーンの民俗演劇のレパートリーのアリアだった可能性がある」という。
- 注 22 : Wirsching, Gustav (1938). Schwäbisches Liederbuch, Kassel, Bärenreiter-Verlag, S.92
- 注 23 : Chinder Musig Wält — Eia popeia, das Muesli isch guet [∞](#)
- 注 24 : 前掲 NMA IV/12/1
- 注 25 : Jahn, Otto (1856). W.A. Mozart. Band 1, Leipzig: Breitkopf und Härtel, S.518 [∞](#)
- 注 26 : NMA I/3: Kleinere Kirchenwerke, Kritischer Bericht (Federhofer, 1964)
- 注 27 : Bayerische Staatsbibliothek, Mus.ms. 4273#Beibd.4; RISM ID no.: 455022996 [∞](#)
- 注 28 : Münster, Robert (2002). Scande coeli limina. Offertorium in festo Sti Benedicti KV 34 (lat) / Solo S, Coro SATB, 2 Ctr, Timp, 2 Vl, Bc / Carus 40.042 [∞](#)
- 注 29 : Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichniss sämmtlicher Tonwerke Wolfgang Amade Mozart's. Nebst Angabe der verloren gegangenen, angefangenen, übertragenen, zweifelhaften und unterschobenen Compositionen desselben. 6. Auflage, Wiesbaden 1964, Hrsg. von Franz Giegling, Alexander Weinmann und Gerd Sievers, Kassel, Bärenreiter [∞](#)
- 注 30 : Nys, Carl de (1982). La musique religieuse de Mozart (邦訳: カルル・ド・ニ (著), 相良 憲昭 (翻訳)『モーツァルトの宗教音楽』(文庫クセジュ 700) 新書、白水社、1989)
- 注 31 : Münster, Robert (2007). Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte, Band 70, Heft 1 [∞](#)
- 注 32 : Süss, Maria Vinzenz (1865). Salzburgerische Volks Lieder mit ihren Singweisen, S.286 [∞](#)
- 注 33 : Erk, Ludwig & Irmer, Wilhelm (1838). Die deutschen Volkslieder mit ihren Singweisen, erstes Heft, Plahn'sche Buchhandlung, S.7 [∞](#)
- 注 34 : Erk, Ludwig & Irmer, Wilhelm (1840). Die deutschen Volkslieder mit ihren Singweisen, fünftes Heft, Plahn'sche Buchhandlung, S.15 [∞](#)
- 注 35 : Zaslaw, Neal (1991). The Compleat Mozart: A Guide to the Musical Works of Wolfgang Amadeus Mozart, W. W. Norton & Company (邦訳: ニール ザスロー (著), ウィリアム カウデリー (著), 森 泰彦 (監修)『モーツァルト全作品事典』音楽之友社、2006)
- 注 36 : Wikipedia: Joseph, lieber Joseph mein [∞](#)
- 注 37 : Alojado Lieder Archiv, Joseph, lieber Joseph mein [∞](#)
- 注 38 : 前掲 NMA IV/12/1
- 注 39 : 百々 隆『ザルツブルグ時代のモーツァルトとミサ曲 Kv.192』アンサンブル・ヴォーチェ、モーツァルト研究 [∞](#)
- 注 40 : Wiktionary: die Katze lässt das Mäusen nicht [∞](#)
- 注 41 : Wander, Karl Friedrich Wilhelm (Hrsg.) (1867). Deutsches Sprichwörter-Lexikon, Band 1. Leipzig [∞](#)
- 注 42 : Weber, Beda (1847). Die Gedichte Oswalds von Wolkenstein: Mit Einleitung, Wortbuch und Varianten, Chap. Wortbuch zur Erklärung der Gedichte Oswalds, Innsbruck, im Verlage der Wagner'schen Buchhandlung [∞](#)
- 注 43 : Erbgut, Zugspitz Region [∞](#)
- 注 44 : Zingerle, Ignaz Vinzenz (1857). Sitten, Bräuche Und Meinungen Des Tiroler Volkes, Chap. Kinderlieder und Kinderräthsel, Innsbruck, Verlag der Wagner'schen Buchhandlung [∞](#)
- 注 45 : Wikipedia: おおきなかぶ [∞](#)
- 注 46 : Salzburg Wiki: Sigmund Haffner [∞](#)
- 注 47 : Salzburg Wiki: Franz Xaver Späth senior [∞](#)
- 注 48 : 前掲 Salzburg Wiki: Franz Xaver Späth senior
- 注 49 : Mikusi, Balázs (2019). Egy újabb zenei tréfa? "Haffner"-szerenád g-moll menüettje, in: A pók és a méh. Haydn- és Mozart-tanulmányok (OSZK Kiadó, 2019) [∞](#)
- 注 50-1 : Juhász, Tibor (2015). A zene végtelen változatossága I. [∞](#)
- 注 50-2 : Wikipedia: Im Märzen der Bauer [∞](#) ; 『農夫は 3 月に』は 1884 初出。《希望》(図 13-1) や K.250 と類似と。

- 注 51 : Asow, Erich H. Mueller von (1955). Mozartiana: Zur amerikanischen Ausgabe des Köchel-Verzeichnisses, in: Die Musikforschung, 8. Jahrg., H. 1, S.77 ∞
- 注 52-1 : The LiederNet Archive, Hans und Hanne. ∞
- 注 52-2 : Hoffmann, August Heinrich von Fallersleben (1900). Unsere volkstümlichen Leider ∞
- 注 52-3 : Moewing, J. H. (1853). Illustrierte Volks- und Vaterlandslieder. Gesammelt von J. H. Möwing. Mit vielen Bildern und Singweisen. ∞
- 注 53 : Levande musikarv, Joseph Martin Kraus (1756–1792): Hans und Hanne. 'Heyda lustig! ich bin Hans' in C major VB 78 (earlier VB 77), 1785 ∞
- 注 54 : Kraus, Joseph Martin, Hans und Hanne, VB 78, Glen Wilson, Birgid Steinberger ♪
- 注 55 : Heisa lustig ich bin Hans in G-Dur, RISM ID no.: 452512173 ∞
- 注 56 : 前掲 Hochradner (2004).
- 注 57 : Klier, Karl Magnus (1935-38): Wir lernen Volkslieder! Bd.3, Der geschlagene Mann (1819) ∞
- 注 58 : Volksmusikland: Bedlweibl wollt Kiarifiart'n gehn (Der geschlagene Mann) ∞
- 注 59 : Grüner, J. (1876). Dictionnaire de la Causerie française : à l'usage des Allemands, Audolf Lechner, S.127 ∞
- 注 60 : 前掲 Volksmusikland
- 注 61 : 前掲 Köchel 6. Auflage (1964)
- 注 62 : Il a des bottes, des bottes Bastien ∞
- 注 63 : NMA VIII/20/Abt. 2: Quartets with one Woodwind Instrument (Jaroslav Pohanka,1962) ∞
- 注 64 : Rietsch, H. (1912-13), 'Ein Sonatenthema bei Mozart', in: Zeitschrift der internationalen Musikgesellschaft 14 Jg. 1912-13. ∞
- 注 65 : Abert, Hermann (1922). W. A. Mozart, Breitkopf & Haertel, S.89, Anm.4 ∞ : 「ヴィゼヴァとサン＝フォワ I. 85 は、この曲 [ト長調のソナタ K.9] がフランスのアリエッテに触発されたことと示唆しているが、私自身は、この曲は南ドイツの民謡に基づいていると考えている。その痕跡は、[中略] イ長調ソナタ K.331 の変奏曲に今でも見出すことができる。リーチュの『モーツァルトのソナタ』p.278-80 は、この依存関係に注目した最初の作曲家だが、やや意外なことに、このメヌエットは元の曲と同じト長調であるにもかかわらず、彼の調査には含まれていなかった。しかしながら、作品の後半部分は、問題の曲のメロディから完全に離れていることは認めざるを得ない」。
- 注 66 : 前掲 Zaslav (1991), 邦訳 : 森 泰彦 (監修) (2006)
- 注 67 : Hořela lípa, hořela · Musica Bohemica/Jaroslav Krček · Jarmila Miháliková · Hana Chlomková ♪
- 注 68 : Dretzel, Cornelius Heinrich (1731). Des Evangelischen Zions Musicalische Harmonie, S.411 ∞
- 注 69 : 前掲 Duyse (1905). p.1645
- 注 70 : Zahn, Johannes. Die Melodien der deutschen evangelischen Kirchenlieder, Band III ∞
- 注 71 : Wikipedia: Wenn alle Brunnlein fließen ∞
- 注 72 : 前掲 Wikipedia: Wenn alle Brunnlein fließen
- 注 73 : LIEDERPROJEKT – Ein Benefizprojekt für das Singen mit Kindern: Es freit ein wilder Wassermann ∞
- 注 74 : Alojado Lieder Archiv: Üb immer Treu und Redlichkeit ∞
- 注 75 : Dittfurth, Franz Wilhelm von (1872). Deutsche Volks- und Gesellschaftslieder des 17. und 18. Jahrhunderts ∞
- 注 76 : Tappert, Wilhelm (1889). Wandernde Melodien: Eine musikalische Studie, S.61 ∞
- 注 77 : タッペルトは《自由への捧げもの》が《ラ・マルセイエーズ》(1792)のあとに作曲されたものとして話を進めているが、グリゾンには旧約聖書のエステル記にインスピレーションを得たオラトリオ《エステル Esther》(1787)があり、このオラトリオの壮大なオルガンで演奏される導入曲は、冒頭が《自由への捧げもの》(図 55)と同じである ♪。つまりグリゾンは同じ旋律を使いまわしているようである。しかし、《エステル》の導入曲(器楽曲)から《自由への捧げもの》(声楽曲)への使いまわしとするには、歌詞の適用の難しさを考慮すると疑問も生じる。一方、Wikipedia では《エステル》の導入曲は 1787 のオラトリオ初版にはなかったが、グリゾン自身が 1792 より後にオラトリオに追加したのだという主張が紹介されている。Wikipedia は「この仮説は根拠がないため認められない」としている (Wikipedia: Jean-Baptiste Grisons ∞)。何れの説が正しいか判断しがたいが、仮に《エステル》の導入曲が「恋人か女房が」に影響を与えた曲の候補になったとしても、図 49 のドレッツェルの曲の方の類似性が高いとは言えるであろう。
- 注 78 : 石原利矩 (2012). クーラウのフルート作品における変奏曲 ∞
- 注 79 : 前掲 神戸モーツァルト研究会 第 311 回例会
- 注 80 : Musica International : Wenn ich ein Vöglein wär' ∞
- 注 81 : Wikipedia: Wenn ich ein Vöglein wär' ∞
- 注 82 : 野口秀夫『アマデー君、遊びましょ』神戸新聞総合出版センター、2015、p.359
- 注 83 : Wikipedia: 夜汽車 (童謡) ∞
- 注 84 : Laborde, Jean-Benjamin de (1773). 'Choix de Chansons', Vol. 4, 68-72 ∞
- 注 85 : モーツァルト研究所 (1977.9). 『モーツァルト全作品目録——年代順主題解説—— V 1778~1779』中央公論社
- 注 86 : Le Chansonnier français, ou recueil de chansons, ariettes, Vaudevilles et autres couplets choisis, 1760 ∞
- 注 87 : 前掲モーツァルト研究所 (1977.9)
- 注 88 : Theaville > Vaudevilles identifiés ∞
- 注 89 : Theaville > Les vaudevilles ∞
- 注 90 : Theaville > Vaudevilles identifiés ∞
- 注 91 : Fischer, Kurt von (1962). NMA IX/26: Variationen für Klavier, Kritischer Bericht ∞
- 注 92 : 2ª edición (Paris: Le Duc, pl.13, ca.1786) en Six airs variés op.18, n° 1 ∞
- 注 93 : Wikipedia: Douze variations sur «La belle Française» ∞
- 注 94 : 前掲 Zaslav (1991), 邦訳 : 森 泰彦 (監修) (2006)
- 注 95 : Albanese, Antoine (1770). Vº recueil de duo à voix égales, romances, brunettes, ariettes... ∞
- 注 96 : 大高誠二 (2024). フランス民謡『美しい羊飼ひディルシス』(Le beau berger Tircis)について ∞
- 注 97 : Whistling, C. F. (1817). Handbuch der musikalischen Litteratur oder allgemeines... Verzeichniss der bis zum Ende des Jahre 1815 gedruckten Musikalien... mugenn ∞
- 注 98 : モーツァルト研究所 (1977.12). 『モーツァルト全作品目録——年代順主題解説—— VI 1780~1782』中央公論社
- 注 99 : Albanese, Antoine (1767). iiiº recueil d'ariettes avec accompagnement ... ∞
- 注 100 : 前掲モーツァルト研究所 (1977.12).
- 注 101 : Ballard, Christophe (1703). Brunetes ou petits airs tendres, Volume 1, p.35 ∞
- 注 102 : Choisy, Pierre Jacques Durand Eustache Martin de (1778). Le sylphe: ou, Le mari comme il y en a peu, comédie en vers libres & en trois actes, mêlée d'ariettes ∞
- 注 103 : The LiederNet Archive: Au bord d'une Fontaine ∞
- 注 104 : Extrait des airs françois de tous les operas nouveaux, qui ont été représentés: appropriés pour le chant ou la flute avec la basse continue, Hummel, 1768 ∞
- 注 105 : 「ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 K.271a (271i) の真正性について ～ロンドのエピローグから分かること～」神戸モーツァルト研究会 第 218 回例会 ∞
- 注 106 : 「ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 K.218 フィナーレの民謡風メロディの引用について」神戸モーツァルト研究会 第 215 回例会 ∞

(作成 : 2024 年 6 月 28 日、改訂 : 2024 年 7 月 11 日)



## 後日の談話室 —— モーツァルト作とされる民謡による作品

## 1. 伝モーツァルト：リート「さあ元氣よく、私はハンスだ」 K. Anh. C 8.13 (Anh.253)

鳥代：ディヴェルティメント K.287 の変奏曲楽章の主題の元となる歌として、わたしたちは図 32、図 33、図 34 を見てきたわけですが、もう一つこの歌曲がありました。でもそれがモーツァルト自身の曲というのであれば話がこんがらがってしまいます。

犬輔：その作品はケッヒェル 6 版によれば図 70 に示されるとおりです。楽譜はオッフェンバッハの J. アンドレから『二つの歌、V.-Nr.750』(1795)として出版されているとのこと。発想記号は「楽しく Froh」で、歌は 4 節 4 Str[ophe]までであると報告されています。



図 70 伝モーツァルト：リート「さあ元氣よく、私はハンスだ」 K. Anh. C 8.13

教授：モーツァルトが民謡を歌曲に編曲したとされるこのメロディと、K.287 で採用したロセッティの編曲メロディとが異なることの説明ができないため、真正性は怪しいね。

## 2. 伝モーツァルト：四重唱曲「百姓女が猫をなくした」 K. Anh. C 9.01 (Anh.188)

犬輔：K.287 のフィナーレの元となる歌として民謡の図 35 を見てきました。さらに四重唱曲の形のものがあり、ケッヒェル 6 版によれば『新しいレビュー Neue Revue』(1907.11)に「R. バトカによる新版」と題してこの楽譜（図 71）が載っているとのこと。



図 71 伝モーツァルト：四重唱曲「百姓女が猫をなくした」 K. Anh. C 9.01

鳥代：これはテンポや音型の点で「百姓女が猫をなくした」（図 35）よりも K.287（図 36）に似ています。ということは K.287 の音楽をベースに既存の歌詞を載せたものではないでしょうか。しかも歌詞はシュヴァーベン方言ではなく、標準ドイツ語になっています。

教授：ところでヨーゼフ・ハイドンにファンタジア（カプリッチョ）ハ長調 Hob. XVII/4 (1789) というクラヴィーア曲（図 72）があるのをどう説明するかね。



図 72 ハイドン：ファンタジア（カプリッチョ）ハ長調 Hob. XVII/4 (1789)

鳥代：明らかに引用ですね。ハイドンの曲における引用元の研究結果は出ていないのですか。

教授：ファンタジアのヘンレ版の序文の執筆者ソーニャ・ゲルラッハは「百姓女が猫をなくした」には一切触れていない<sup>注107</sup>。

犬輔：ディヴェルティメント（図 36）、四重唱（図 71）、ハイドン（図 72）はともに 2 小節目が二つの十六分音符を八分音符が挟むという特徴を共有しています。ということはこれらの引用元が図 35 の民謡「百姓女が猫をなくした」でも、図 37 のシュヴァーベン民謡《殴られた男》でもない可能性を示唆します。このことはディヴェルティメント 変ロ長調 K.287 フィナーレの引用元の調査を振り出しに戻しますよ。

鳥代：わたしの仮説はこうです。モーツァルトは《殴られた男》（図 37）を基にディヴェルティメント（図 36）を作曲した。そのディヴェルティメントを基に四重唱（図 71）およびハイドン（図 72）がさらに流用したというものです。

犬輔：異議あり！ メロディの類似性からは鳥代さんの説が成立するとしても、四重唱の歌詞が何故「百姓女が猫をなくした」なのかの説明がつかません。

鳥代：四重唱の編曲者はオリジナルが《殴られた男》であることを知りませんから、ディヴェルティメントのメロディに合う歌詞を探し、たまたま「百姓女が猫をなくした」の歌詞にしたと考えられます（つまり替え歌）。ハイドンもオリジナルを知りませんし、四重唱も知りませんから、ファンタジアにサブタイトルを付けなかったのです（一方、図 14 のカプリッチョには「8 人のへば仕立て屋に違いない」のサブタイトルを明記していました）。

犬輔：鳥代さんの説でもう一つ疑問なのはハイドンが 1789 にモーツァルトのディヴェルティメント K.287 を参照できたのかということです。K.287 の初版（パート譜）は 1799（アウクスブルク）<sup>注 108</sup>ですから無理だったのではないのでしょうか。

教授：では、犬輔君の仮説を述べてみなさい。

犬輔：そもそもモーツァルトが引用したのはシュヴァーベン民謡《殴られた男》（図 37）でも「百姓女が猫をなくした」（図 35）でもなく、我々に未知の「百姓女が猫をなくした」の異版ではないかというものです。それをモーツァルトとハイドンがともに参照したとすれば話が合います。

教授：異版に関する情報はないが、19 世紀の演奏の一例として『オランダの総合音楽雑誌』（1870）に掲載されたミュンヘンからの外国レポートを読んでみよう。「興味深いこととして、ここ [ミュンヘン] で何年も連続して繰り返されてきた一種の音楽演奏について触れておく必要がある。毎年クリスマスに旧アウグスティヌス教会で開催される恒例の行事「幼いキリストの体重を量る Einwiegen des Christkindleins」はクリスマス当日の朝 6 a.m. から 8 a.m. までオルガンの伴奏の下で行われた。当時の熟練したオルガン奏者であるモースマイヤー August Moosmair (1851–1915) [?] は、優れたテクニックに加えて、レジスター操作にも特別な才能を持っており、その際に即興で演奏し、通常は即興演奏のテーマとして民謡を選んだ。この習慣は最古のクラシック音楽アーティストの間ですでに流行しており、モースマイヤーの時代には「百姓女が猫をなくした Bauerin hat d' Katz verloren」という歌がミュンヘンの人々のお気に入りのメロディであり、私たちのオルガン奏者はこの冒険的な曲をなんとかドレスアップして処理した。そのあまりの巧みさに、会衆全体が教会に深い影響を与えた。同僚の演奏に対してあまり寛容ではない音楽家たちでさえ、彼の演奏の素晴らしさを十分に認めざるを得なかった」<sup>注 109</sup>。

鳥代：その歌も異版の一つかも知れないということね。

### 3. 伝モーツァルト：民謡風の歌「喜びの声であなたに挨拶いたします」

犬輔：「喜びの声であなたに挨拶いたします Sei uns mit Jubelschalle」はモーツァルトが 1791 に作曲したクリスマスソングであると言われ、幾つかの録音もあります。

鳥代：私は全く知らなかったけれど、出版されているのですか。

犬輔：『私たちの歌集：学校、日曜学校、家族向けの最も美しい歌』（1893）に四重唱の楽譜が掲載されています（図 73）<sup>注 110</sup>。



図 73 伝モーツァルト：民謡風の歌「喜びの声であなたに挨拶いたします」<sup>♪</sup>

教授：『青少年クリスチャンのための詩篇のよろこび』（1890）には歌詞のみが載っている。そこでは、J. A. P. シュルツ（図 32 で言及した作曲家）の作曲になっている<sup>注 110</sup>。

犬輔：リート「春への憧れ」K.596 に一部似ていますが、似せているだけかもしれません。

鳥代：歌詞を訳しておきましょう。

表 7 伝モーツァルト「喜びの声であなたに挨拶いたします」歌詞（第 1 節）

Sei uns mit Jubelschalle, Christkindchen, heut gegrüßt! Wie freuen wir uns alle, Daß dein Geburtstag ist. Für uns zur Welt geboren, Lagst du auf Heu und Stroh; Sonst wären wir verloren, Nun aber sind wir froh.	幼児キリストよ、今日は喜びの声で あなたに挨拶いたします！ 私たちはみんなとても幸せです、 今日があなたの誕生日です。 私たちのためにこの世に生まれ、 あなたは干し草とわらの上に横たわりました。 そうでなければ私たちは迷子になっていたでしょう、 しかし今は幸せです。
--	--

教授：NAXOS の CD にはヘルムート・ランメル Helmut Lammell (1950– ) の作曲（1978）とあるが、部分的編曲のことと思われる<sup>注 112</sup>。いずれにせよモーツァルトの作品ではありえない。

注 107：Gerlach, Sonja (2017). Joseph Haydn Fantasia C major (Capriccio) Hob. XVII:4, Henle HN 952 ∞

注 108：NMA VII/18: Divertimenti für 5-7 Streich- und Blasinstrumente, Kritischer Bericht (Stüwe, 2004) ∞

注 109：KNTV (1870). Caecilia: algemeen muzikaal tijdschrift van Nederland ∞

注 110：Unser Liederbuch: die schönsten Lieder für Schule, Sonntagsschule und Familie, Pilger Buchhandlung, Reading, Penn., 1893 ∞

注 111：Psalterlust fuer die Christliche Jugend, J. L. Trauger, Columbus, Oh., 1890 ∞

注 112：クリスマス合唱作品集（アマデウス合唱団／マツ）ARS38088 ∞